

りょうぜん天蚕の会 設立20周年記念誌(1号)



「りょうぜん天蚕の会」

りょうぜん天蚕の会より

【第1号～第20号】

ダイジェスト版



目 次

記念式典次第・祝賀会次第	P. 3
あいさつ 会長・伊達市長・県北農林事務所伊達農業普及所長	P. 4 ～ 6
記念講演 信州大学教授 梶原善太 様	P. 7
天蚕の会 20 年の歩み	P. 8 ～ 9
天蚕を育てよう（八島利幸氏の論文）	P. 10
天蚕の会発足と柳沼前会長とのエピソード（八島利幸氏）	P. 11
ギョッとふくしま（天蚕を特産に・織り手 八島恭子さん）	P. 12 ～ 14
会員の活動スナップ	P. 15
りょうぜん天蚕の会だより 第 20 号	P. 16 ～ 17
りょうぜん天蚕の会だより 第 19 号	P. 18 ～ 19
りょうぜん天蚕の会だより 第 18 号	P. 20 ～ 21
りょうぜん天蚕の会だより 第 17 号	P. 22 ～ 23
りょうぜん天蚕の会だより 第 16 号	P. 24 ～ 25
りょうぜん天蚕の会だより 第 15 号	P. 26 ～ 27
りょうぜん天蚕の会だより 第 14 号	P. 28 ～ 29
りょうぜん天蚕の会だより 第 13 号	P. 30 ～ 31
りょうぜん天蚕の会だより 第 12 号	P. 32 ～ 33
りょうぜん天蚕の会だより 第 11 号	P. 34 ～ 35
りょうぜん天蚕の会だより 第 10 号	P. 36 ～ 37
りょうぜん天蚕の会だより 第 9 号	P. 38 ～ 39
りょうぜん天蚕の会だより 第 8 号	P. 40 ～ 41
りょうぜん天蚕の会だより 第 7 号	P. 42 ～ 43
りょうぜん天蚕の会だより 第 6 号	P. 44 ～ 45
りょうぜん天蚕の会だより 第 5 号	P. 46 ～ 47
りょうぜん天蚕の会だより 第 4 号	P. 48 ～ 49
りょうぜん天蚕の会だより 第 2・3 号	P. 50 ～ 51
りょうぜん天蚕の会だより 第 1 号	P. 52 ～ 53
会員からのメッセージ〈思い出様々〉	P. 54 ～ 60
天蚕のうた・りょうぜん天蚕音頭	P. 61



りょうぜん天蚕の会 設立 20 周年記念式典・祝賀会次第

記念式典

1. 開会のことば 大友 靖子
2. 会長あいさつ 菅野 秀一
3. 来賓祝辞
(1) 伊達市長 須田 博行 様
(2) 福島県県北農林事務所 伊達農業普及所長 渡辺 敏弘 様
4. 来賓紹介 伊達市議会議長、伊達市観光物産交流協会代表理事
霊山振興公社代表理事、富田蚕種製造所、白鷹町天蚕生産組合
5. 功績者表彰 斎藤 行應 様、奥山 俊雄 様
6. 20年の歩み 事務局長 八島 利幸
7. 記念講演 「天蚕飼育の現状と未来について」
信州大学学術研究院繊維学系
附属農場野蚕研究センター 教授 梶浦 善太 様
8. 閉 式

祝 賀 会

1. 開 会
2. 会長あいさつ
3. 来賓あいさつ 伊達市市議会議長 菅野 喜明 様
4. 乾杯のご発声 伊達市観光物産交流協会 代表理事 佐藤 芳明 様
5. アトラクション 天蚕音頭披露 (会員)
6. 祝電披露 事務局長 八島 利幸
7. 懇 談
8. お 開 き

「りょうぜん天蚕の会」設立20周年を迎えて

会長 菅野 秀一



平成17年2月に設立した「りょうぜん天蚕の会」はこの度20周年を迎えました。このように活動を継続できたことは偏に、福島県、伊達市、伊達市観光物産交流協会、日本野蚕学会など多くの機関、関係者のご指導とご支援の賜と深く感謝いたします。

天蚕については皆様は既にご存じと思いますが、野生のカイコ、ヤマユガで、美しい緑色、いわゆる萌葱色の繭を結びます。会員は地元霊山町、伊達市をはじめ県内各地、そして仙台市、宮城県丸森町、大阪府、長野県からの入会があり、現在40名ほどで天蚕を飼育し、織物、繭加工品の製作など楽しく活動しています。その内容は、当会の活動方針である「霊山の豊かな自然環境を活かし、野蚕である「天蚕」の育成と、その飼育体験交流や独特の風合いをもつ萌葱色の繭・絹糸の新たな加工や商品化による地域特産品の創成をはかり、活力ある地域づくりを推進する。また、会員一丸となって繭の生産、新商品開発に取り組むとともに、小学校等への観察用天蚕配布、県内外天蚕関係者との交流及び展示PR活動等を行う。」ことでもあります。

これまでの20年の活動を振り返りますと順風満帆と言い切れるものではなく多くの課題がありました。天蚕という難しい「生き物」を飼育することであり、趣味と生業を厳に自覚することでもあります。土日休日だけの作業とは行かず、正に養蚕本業を実践することであることから、常に飼育作業に従事できる会員、また、天蚕飼育のノーハーを熟知している会員が必要です。会員大勢が常に対応することは困難であり、作業工程に合わせた人員手配が通年の大きな課題でありました。

また、天蚕繭の製品化のため、繭の加工、紡ぎ、繰糸、綜紉、機織り等については知識と高度な技術を要し、習得には相当の月数を要します。特に天蚕は家蚕と違い、繭の性質を異にすることから、それら技術の習得が必須でありました。

しかし、このような状況にありながらも会員のたゆまぬ努力により課題を克服し飼育して参りました。また、課題克服と並行して諸活動を正に実践して参りました。これらの活動状況は、毎年3月に発行している「りょうぜん天蚕の会だより」で、会員、関係機関に配布報告しておりますが、皆様には本記念誌にダイジェスト版として綴りましたので一読いただければ幸いです。

ここで当会の発足のきっかけについて概略紹介したいと思います。本記念誌の8頁から13頁に詳細があります。

当会事務局長の八島利幸さんが常々「近隣の山林が荒廃しているな」、「300ヘクタール以上ある桑園が活用されていないな」、「天蚕を見かけなくなったな」と憂いを感じておったそうです。そんな折り、福島県が「中山間部の遊休農地の活性化ビジョン」をテーマにした懸賞論文の募集が目にとまり、早速これらのことを論旨として「天蚕を育てよう」という題で応募したところ見事入賞されました。八島さんは霊山町の某会議で前会長の柳沼泰衛氏と初めて出会い同席します。その際、柳沼氏が蚕の専門家であり、福島県の養蚕関係の要職にあった方とは知らず「日本固有の種と養蚕復興の夢」の論文論旨を熱く説いたそうです。柳沼氏はこの論旨に大いに共感して「それじゃあ、天蚕を育てようじゃないか。養蚕の伝承にもなる。」と意気投合したそうです。

天蚕に魅力を持ち早くから研究されていた柳沼泰衛氏と和紙工房を主宰する八島利幸氏は、これらの復活を願い、さらに地域資源として活用し特産品にしようと意を共にします。

ここに平成17年2月、長年養蚕を営んでいた方々や異業種に関わる方々、有志40余人の賛同を得て「りょうぜん天蚕の会」が設立されたのです。

パイプハウスのあった遊休農地を借り受け、県蚕業試験場から飼育樹「エゾノキヌヤナギ」を譲り受け、柳沼さんと斎藤行応さんの二人は軽トラックで苗木を運んで育成し、天蚕の飼育を始めました。

天蚕の会設立と同時に福島県の「地域づくりサポート事業」の採択を受け三年間の支援を頂きました。また、伊達市からは「伊達市地域振興助成事業」の採択をいただき、毎年、当会活動に多大な支援をいただいております。

このように20周年を祝える事が出来たのは先輩諸氏の研鑽努力の活動であり、また、関係団体のご協力の賜であり、そして会員全員の熱心な活動があったからこそであります。重ね重ね心から感謝を申し上げます。

りょうぜん天蚕の会設立20周年を祝して

伊達市長 須田 博行



「りょうぜん天蚕の会」が、設立20周年を迎えられましたことに対し、心よりお祝いを申し上げますとともに、歴代の会長並びに会員の皆様がこれまで築いてこられた活動に対し、心より敬意を表します。

貴会は、平成17年2月に40名の会員により設立され、養蚕・製糸技術の伝承に積極的に取り組まれ、特に小中学校での体験学習では、蚕の飼育や糸取り体験などの指導を継続されてきました。

また、「繊維のダイヤモンド」とも呼ばれる日本原産の天蚕を飼育しながら、天蚕糸や繭などを利用した特産品の開発など、長年にわたり、伊達市の地域振興に大きく寄与していただいております。

伊達市におきましても、平成31年3月に「伊達地方の蚕種製造及び養蚕・製糸関連用具」1,344点が国の重要有形民俗文化財に指定されました。日本の近代化に大きく貢献した伊達地方の蚕糸業を支えた貴重な道具類の価値が評価されてのことです。これら文化財の中には、市内各地域から集められた用具が多数あり、往時の様子を偲ぶことができます。

霊山地域においては、明治時代に世界的生糸ブランドとして名声を博した「掛田折返し糸」が生産され、また、掛田養蚕伝習所の開設により、養蚕の技術が広く全国に伝えられるなど、養蚕・製糸業の大きな発展がありました。

全国に名を馳せた伊達地方の養蚕・製糸業を大切な地域の歴史、文化として、次世代を担う子どもたちに受け継いでいかなければならないと思っております。

貴会におかれましても、養蚕・製糸における伝統技術や文化の伝承者として、引き続き、本市の地域振興の一翼を担っていただけるようお力添えをお願い申し上げます。

結びに、「りょうぜん天蚕の会」の益々のご発展と、会員の皆様のご健勝をご祈念いたしまして、お祝いのことばいたします。

りょうぜん天蚕の会設立20周年を祝して

福島県北農林事務所伊達農業普及所長 渡邊 敏弘



このたび、りょうぜん天蚕の会が設立20周年を迎えられましたことを 心からお慶び申し上げます。

りょうぜん天蚕の会は、日本固有の野生の絹糸昆虫である「天蚕」を活かして、かつて養蚕で栄えた地域を再び活気づけようと、霊山町を中心とした有志が結成したと伺っております。その活動は、天蚕の飼育や天蚕まゆの生産に止まらず、商品開発と地域特産品づくりを通じての異業種交流、さらには地域の子供たちを対象とした観察会の開催など幅広く行っておられます。

20周年に至るまでには、未曾有の大惨事であった東京電力福島第一原子力発電所の事故の放射性物質による汚染や風評、新型コロナウイルス感染症の拡大による行動抑制など会の活動が大きく制限される事態もありました。そのような中、りょうぜん天蚕の会は菅野会長を中心に会員相互が連携し、しっかりと事業を継続してこられたことは御努力の賜物と、心から敬意を表する次第であります。

近年は、天蚕まゆの生産において異常気象の影響から山付け時期の判断が難しくなっており、さらにはカミキリムシによる株被害が発生するなど難しい問題が起こっていると聞いております。

県としましては、天蚕の飼育や天蚕まゆの生産に対する支援に加え、PR等を通じて地域活性化の取組に対しても協力してまいりたいと考えております。言わずとも、かつて伊達地方は全国有数の養蚕地帯であり、養蚕(家蚕)は、地域経済を支える生産活動の柱でありました。私の家でも「かいこ様」として収入の中心でもあり、桑かけ等の手伝いが日課でもありました。しかしながら、養蚕農家は昭和初期をピークに減少し、ついに伊達地方においては、養蚕農家はゼロとなっております。非常に寂しいことではあります。養蚕を知る我々、経験者の責任として、しっかりと天蚕も含む養蚕等の分化について、後世に語り継ぐ必要があると考えております。りょうぜん天蚕の会の皆様には、「天蚕」を通じて地域交流、地域活性化にさらに寄与していただきたいと心から願っております。

結びに、りょうぜん天蚕の会の20周年の節目にあたって、今後ますますの御発展と、関係各位の御健勝と御活躍を御祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

天蚕飼育の現状と未来について

信州大学学術研究院繊維学系
附属農場野蚕研究センター
教授 梶浦善太

1970年代から1980年代にかけて、養蚕農家の中には県の指導によって天蚕生産へ変更する農家があった。天蚕の生産が最も多かったのは平成3年度(1991年)であった。その年の蚕業に関する参考統計には31県139市町村367戸において、1,373,815頭の天蚕が飼育され、繭728,034粒、重量にして5,006kgの繭が得られた記録が残っている。それ以降、バブル景気の崩壊とともに天蚕の生産は減少していった。平成7年度(1994年)には繭生産量が277686粒と平成3年度の半分以下となり、平成17年度(2005年)には99321粒とさらに減少した。バブル景気の崩壊以降、農家の高齢化と後継者不足、生産効率の低さ、製品の生産販売の難しさもあって天蚕飼育をやめていく農家が増えたのである。平成18年度(2006年)の統計では87697粒となってさらに減少した。その年では13の都道府県、21の市町村に48戸の飼育農家があった。これが最後の統計になって日本国内の天蚕生産の状況はわからなくなった。私たちが15年後の2021年に調べたところ12の都道府県で15の個人・団体が天蚕を飼育していた。その方々に2016年から2021年までの収繭量をおたずねしたところ、2016年から2019年にかけて総収繭量は約61000粒、約69000粒、約74000粒、約51000粒であった。いただいた回答の中には2016年から2019年に未記入であるところがあったので、実際は70000粒から80000粒に増えて約60000粒に減ったと推測している。2020年と2021年では、約58000粒、約58000粒と横ばい状態であった。この2年間の回答に未記入がなく、それらの数値は実際の数値に近いと考えている。

天蚕生産者・団体の背景は二通りに分かれている。一つは、江戸時代から天蚕の歴史がある長野県安曇野市穂高有明と広島県広島市可部、もう一つは、昭和時代に家蚕の養蚕が盛んであった地域で平成時代以降に天蚕を始めたところ、例えばりょうぜん天蚕の会、群馬県中之条の登坂天蚕工房、富山県八尾市のがうん天蚕の会である。最近では、令和3年(2021年)に奄美大島で奄美天蚕(*Antheraea yamamai yoshimotoi*)を大島紬に利用する活動が始まっている。

調査の結果から、天蚕繭の生産量が多いところの共通点が明らかになった。①元養蚕指導員の支援、②自治体の支援、③ボランティアの参加、④製品販売、⑤大学の支援、これらのいくつかの要素があるところは天蚕の生産量が数千頭以上だったのである。独立している個人の天蚕生産者でも過去には五つのどれかと接点があった。

本学部付属農場(野蚕研究センター)では天蚕卵(種)を毎年約4万粒用意して天蚕飼育者のリクエストに応じてきた。新型コロナ禍後、天蚕卵の配布量は特に減っていない。最近3年間でどれくらい天蚕繭が生産されていたのか3年ぶりに調査を始めるところである。

最後に天蚕の未来についてである。これまでは繭と天蚕糸の利用に限られていたので観光資源にはなるが、製品としては需要が少なくビジネスに発展するかどうか難しかった。そこで、別の利用としては、10年ほどブームになっている天蚕昆虫食の実現可能性を試してみたいことを示唆しておきたい。

りょうぜん天産の会 20年の歩み

天蚕で養蚕の歴史をつなぐ

「最近、山で天蚕をみかけないな一、山が荒れているせいだろう」、「桑畑が300haもあるのに利用されず荒廃しているな一」と憂いを抱いた八島利幸氏は、福島県の懸賞論文テーマ「中山間部の遊休農地の活性化ビジョン」に応募し入賞した。

八島氏は会議で柳沼泰衛氏と初めて出会い同席した。その際、柳沼氏が蚕の専門家であり福島県の養蚕に関する要職にあった方とは知らず、「日本固有の種と養蚕復興の夢」の論文論旨を熱く説いたところである。柳沼氏はこの論旨に大いに共感し、「それじゃあ、天蚕を育てれば、自然も取り戻せるし、養蚕の伝承にもなるのではないか。」と意気投合した。

「りょうぜん天蚕の会」の設立

天蚕に魅力を持ち早くから研究されていた柳沼泰衛氏と和紙工房を主宰する八島利幸氏は、これらの復活を願い、さらに地域資源として活用し特産品にしようと意を共にした。

ここに、平成17年2月、長年養蚕を営んできた方々や異業種に関わる方々、有志40余人の賛同を得て「りょうぜん天蚕の会」を設立した。活動方針を「霊山の豊かな自然環境を活かし、野蚕である天蚕の育成と、その飼育体験交流や独特の風合いをもつ萌葱色の繭・絹糸の新たな加工や商品化による地域特産品の創成をはかり活力ある地域づくりを推進する。また、会員一丸となって繭の生産、新商品開発に取り組みとともに、小学校等への観察用天蚕配布、県内外天蚕関係者との交流及び展示PR活動等を行う」ととした。

これらの取り組みに対し、福島県、伊達市等からの支援を得て、天蚕の飼育、絹糸織物、繭工芸等の製品化への活動が進展した。

年 度	月 日	特 記 事 項	山付回	繭収量
平成 17 年 2005	2 月 5 日	りょうぜん天蚕の会設立 会員 40 名	1	2,930
	4 月 12 日	県北地方振興局より地域づくりサポート事業 90 万円交付		
	5 月 2 日	休耕地に飼育樹エゾノキヌヤナギを植樹、初の山付け作業		
		町内各小学校に天蚕観察用の飼育鉢を寄贈		
	1 月 14 日	地域づくりサポート事業の実践活動発表講演		
平成 18 年 2006	4 月 23 日	地域づくりサポート事業 80 万円交付	2	3,570
	8 月 22 日	グリーンツーリズム交流会、天蚕観察会を開催		
	11 月 14 日	山形県白鷹町天蚕の会と交流研修会 米沢で織物会館見学		
平成 19 年 2007	4 月 21 日	地域づくりサポート事業 70 万円交付	3	6,880
	8 月 21 日	「全国天蚕交流セミナー」を開催 霊山こどもの村		
	11 月 13 日	白鷹町で織物と経糸研修、天蚕の繭工芸指導、天蚕種の交換		
	1 月 12 日	地域づくりサポート事業の活動発表会、天蚕布の完成報告		
		「天蚕布の織物完成」民友新聞全県版に掲載		
平成 20 年 2008	6 月 10 日	町内各小学校で天蚕観察体験実施	3	6,920
	7 月 21 日	宮城テレビの取材を受ける 繭収穫、紬作業等を収録		
	10 月 10 日	「全国生涯学習見本市」に展示 秋篠宮様の質疑を受ける		
	10 月 23 日	「全国シルクサミット 2008in ふくしま」において事例発表		
平成 21 年 2009	6 月 25 日	NHKテレビ「ふるさと一番」全国生放送 天蚕大反響	3	6,010
	8 月 27 日	大日本蚕糸会、県園芸課が飼育場視察に来訪		
	9 月 29 日	県農業総合センターで「天蚕ハイブリット糸づくり講習会」		
	11 月 18 日	福島特産品コンクールに出品 「天蚕ハイブリットショール」奨励賞受賞		
	12 月 20 日	「ふるさと福島大交流フェア」 東池袋サッポロインテイクに展示販売		
平成 22 年 2010	4 月 13 日	大日本蚕糸会より「純国産絹マーク」の認証を受ける	3	7,100
	8 月 31 日	伊達地区グリーンツーリズム推進協会で「天蚕体験」を行う		
	9 月 21 日	国際野蚕学会に参加 天蚕商品展示、発表交流会に参加		
	12 月 7 日	県農業総合センターの「新商品開発企画会議」で意見徴収		

年 度	月 日	特 記 事 項	山付回	繭収量
平成 23 年 2011	8 月 24 日	天蚕飼育樹の放射能測定 県農業総合センターより影響無報告	3	7,900
	9 月 25 日	機織り後継者育成研修・講習会実施		
	10 月 12 日	東京八重洲口「福島交流館」で純国産絹・天蚕商品展示販売		
	10 月 13 日	「りょうぜん天蚕の会」のロゴマーク「商標登録」される		
平成 24 年 2012	8 月 2 日	ハイテクプラザ研究発表会に参加	3	7,800
	9 月 8 日	日本野蚕学会に参加 商品展示(つくば市)里なび研修会(十日町市)		
	9 月 21 日	国際野蚕学会に参加 商品展示(東京農大)		
	10 月 27 日	昭和村からむし織物会館で交流研修		
平成 25 年 2013	6 月 1 日	純国産絹商品の展示 (京都市)	3	8,800
	7 月 8 日	純国産絹商品の展示 (有楽町シルクセンター)		
	8 月 20 日	純国産絹商品の展示 (札幌市)		
	1 月 2 日	「純国産宝絹展」の展示 (伊勢丹新宿店、高島屋横浜店)		
平成 26 年 2014	4 月 14 日	柳沼泰衛会長逝去	2	6,000
	10 月 25 日	「りょうぜん天蚕の会」設立 10 周年記念式典		
	2 月 5 日	養蚕振興セミナーで瓜田副会長講演		
	2 月 6 日	純国産「宝絹」試作品展に参加 (有楽町シルクセンター)		
平成 27 年 2015	5 月 24 日	掛田小学校に天蚕飼育ハウス復活設置	3	7,000
	10 月 15 日	「シルクサミット」に瓜田副会長参加 (滋賀県長浜市)		
		ビーテングふい絹と「コラボショール」作成		
	2 月 16 日	母蛾検査用顕微鏡 2 台購入		
平成 28 年 2016	6 月 19 日	霊山こどもの村で繭工芸指導	3	7,000
	11 月 12 日	「東京ふるさと霊山会」に製品展示販売		
		「猪の皮」と「天蚕布」のコラボ製品試作		
		天蚕製品が伊達市「ふるさと納税返礼品」に登録		
平成 29 年 2017	5 月 21 日	県農業総合センター職員が飼育場で研究用害虫捕獲	3	7,700
	9 月 2 日	山形県白鷹町で天蚕の会と交流研修会		
	2 月 27 日	掛田小と上保原小で、生糸、真綿、コサージュづくり指導		
平成 30 年 2018	12 月 20 日	道の駅「伊達の郷りょうぜん」に天蚕製品展示販売	2	6,000
	6 月 13 日	「ふくしまシルクロードを行く」一行が天蚕飼育園場視察		
	6 月 23 日	白鷹町天蚕の会が飼育場視察に来訪		
令和 元年 2019	3 月 29 日	大阪大学教授 3 名と研究生 2 名が天蚕活動視察に来所	1	4,000
	7 月 6 日	「天蚕・絹業提携グループ」職員が天蚕活動視察に来所		
	8 月 5 日	草津市の小学 6 年生 26 名に紅彩館で天蚕繭工芸を指導		
令和 2 年 2020	5 月 13 日	山形新聞に「白鷹町天蚕の会に りょうぜん天蚕の会の支援」の記事掲載	1	4,000
	10 月 3 日	天蚕製品の開発研究会を開催 講師にリンベル(株)		
		掛田小の小林はるのさん「天蚕」作文で市民憲章作文コンで優秀賞		
令和 3 年 2021	6 月 10 日	就学支援事業所で繭工芸指導	1	2,500
	11 月 11 日	県立保原高校定時制で天蚕コサージュづくり指導		
	11 月 27 日	天蚕繭と家蚕繭の「紬研修会」開催 講師に京都の下村氏、竹内氏		
	11 月 28 日	母蛾検査 大阪大教授 3 名、研究生 2 名、信州大教授 1 名 参加		
令和 4 年 2022	7 月 10 日	読売新聞が天蚕飼育活動取材 (7 月 17 日の朝刊に掲載)	1	2,200
	10 月 14 日	「経糸掛」・「綜統」の研修会を開催		
	11 月 8 日	伊達市内小学生に「繭工作」を指導 簡易宿泊施設：泊っぺ		
	1 月 19 日	大阪大学「放射能移行実証試験地」の樹木整備を支援		
令和 5 年 2023	6 月 27 日	「紬」研修会を開催	1	1,900
	9 月 10 日	「天産まつり」を開催 伊達市梁川町「まちの駅やながわ」		
	11 月 11 日	「天産まつり」を開催 福島市飯坂町「旧堀切邸」		
	10 月 28 日	「霊山町文化祭」に天蚕製品協賛展示		
	12 月 7 日	掛田小学校総合学習で「繭工芸」「糸づくり」の体験指導		

入賞

天蚕を育てよう

霊山町 八島 利幸

私は安達町上川崎地区で生産される「純こうぞ」の製紙を原材料として和紙工芸品を生産している者です。その為たびたび安達町を訪ねる機会があるのですがその道々遊休桑園が荒廃しているのを目にするのであります。そしていつも「もったいない、なんとかならないものか」と思うのです。桑園が荒廃しておりますから自ら土手に植えられておりました「こうぞ」も手入れされないまま放置されるかエンジン機で草と一緒に刈られており和紙生産地区でさえ原料の「こうぞ」不足をきたしておる現状で東南アジア産の「こうぞ」を求め、またパルプ入の不純な和紙づくりをしております。

そこで私は遊休桑園に天蚕を飼育してはいかがかと思えます。ご存じの通り、繭には高品位の蛋白質が含まれており今日では絹織物としてよりも健康食品や化粧品に利用され繭の新しい価値が生まれております。天蚕には一般蚕より以上の蛋白質が含まれているといわれておりますのでこれからより付加価値のある天蚕を飼育していくことは遊休桑園の活性化になります。

天蚕は鳥という天敵がありますがネットを利用した飼育方法を採用すれば天敵や逃亡から守られます。また、天蚕入り和紙という新しい製品を生産して上川崎地区の和紙生産者達が魅力ある和紙づくりに取り組めれば地域の活力が生まれるようになるでしょう。

和紙づくりが衰退したのは冬の辛い作業の割にはお金にならないというのが実情であります。繭づくりも同じでありましょう。外国産の安い繭に対抗して付加価値のついた天蚕の生産に取り組まれるようにすれば希少価値が高収入につながり、労働に割に合う仕事として再生産になることでしょう。桑園の手入れが進めば再び「こうぞ」の手入れもなされ外国産の弱い原料に頼ることなく「昔とった杵柄」を生かしながら養蚕農家の活性化になりましょう。何よりも、現桑園の利用という点と新しい価値のある製品の生産という点に農業を営む人々に活力を与えるものになります。

和紙の原料となる「こうぞ」は桑の副産物としての和紙原料でありましたが、今日では東南アジアからの輸入に頼っております。しかし、南国育ちの為、繊維が弱く本来の和紙の強靱さがありません。「こうぞ」和紙は綿に替わる布（紙衣）として生産されていきました。その強靱さと天蚕の光沢性・透過性とドッキングした和紙は安達地区の特産品として市場性があることを確信しております。更に「こうぞ」の畝間にコンニャクの栽培が可能です。コンニャクは今後益々健康食品として利用されます。また、安達地方の特産品ともなっていないので商品開発の余地が残っておることでもあります。安達ヶ原や智恵子の生家や二本松菊人形展という観光スポットを利用した販売経路がありますので全国展開が可能です。

もう一つは、遊休桑園の桑をそのまま木材として利用することが出来ます。桑は大木になると固く木目が美しく「欄間」や「床柱」として、端材は「茶托」や「茶筒」として利用できる良質の木材であります。これを遊ばせておくことはないのです。ちょっと手を加えて、つまり剪定をすれば価値ある木材となることを生産者に教えて手入れをしていただきたいのです。付加価値をあたえて価値ある木材となれば生産者にとっては遊休桑園にするはずがありません。全国有数の養蚕地区であった安達地方の新しい展開になることでしょう。

よみがえれ養蚕、よみがえれ陸奥和紙

天蚕の会発足と柳沼前会長とのエピソード 2つ、3つ

事務局長 八島 利幸

平成8年、福島県県北地方振興局が「中山間部の遊休農地の活性化ビジョン」をテーマにした懸賞小論文を募集しました。私は早速「天蚕を育てよう」をテーマで応募しました。但し、推薦自治体は霊山町ではなく「安達町」であったのです。霊山町には遊休桑園370ヘクタール超もありながらも私の提案を空言とし、小論文を推薦してもらえませんでした。そこで和紙工芸でお付き合いしていた安達町に推薦をもらうことになったのです。地方振興局は50人超の応募があった中から入選作10題を小冊子としました。まだ、「安達町」には6軒の養蚕農家があったので桑栽培の畝間にコンニャク栽培も取り入れた提案としました。

小生の「天蚕を育てよう」は、入選者10人がいましたが、小生の提案は実体がないと評され佳作金1万円で終わりました。最優秀賞には安達道の駅上り線で地元の野菜直売「青空市場」を展開して、初年度2百万円、次年度4百万円、三年度は8百万円と倍々と売上金が伸びた事例を発表した安達渋川地区グループが選ばれました。優秀賞には「桑茶製作」を提案された保原町の赤間真理子さんが輝きました。既に「桑茶」は市販されていました。更に、桑畑と養蚕家をベースにした地域づくりを展開し、都会の人々と田舎に暮らす人との交流を発表しました。既に「草原社」を立ち上げており、田舎の農産物を定期的に以前住んでいた神奈川県の人々に直送している事例を発表した。農産物のみならず、時々私どもの「和紙工芸品」を同封しておりましたので、プレゼンテーションに際して桑の古木で製作したミニ衝立を貸与したものでした。このように提案小論文であっても実態が伴わないと認められないと発表後に理解しました。

柳沼前会長とは霊山町体育協会専門部会を通して知り合いました。彼が梁川町にあった福島県蚕業試験場所長を務めた方とは全く存じあげませんでした。そんな彼に私は滔々と「天蚕を育てよう」を説いたのですから笑う他ないのです。しかし、天蚕繭を利活用となると私は激論を交わすこと多々ありました。

一つ目は、繭の原価計算が低いのでした。彼は借地の飼育圃場が親戚の土地なので計算に入れていませんから安い原価になります。原価計算に借地代を入れての計算とすべきと口論しました。二つ目は、会員たちの飼育に関わる全ての労力をボランティアとっていました。三つ目は、繭の表皮を利用してアクセサリーを商品化しましたが「価格設定が高いから売れない」という。

天蚕の会創設二年目に先進地視察があり、埼玉県秩父市の道の駅「花園」で「天蚕繭を利用したアクセサリー」を販売しているのを拝見しました。「花園」の天蚕商品は当会より価格が高く繭の毛ばたちを抑える為べったりとコーティングされて天蚕らしさが失われていました。柳沼氏に「当会のアクセサリーも毛ばたちを抑えるコーティングをしているが「和紙工芸」の技術を施しているので全く毛羽立たないのですよ」と秘策を教えたら、以後、価格の件も商品の萌葱色を残す技術を自慢するようになりました。

このように養蚕の専門家との対話は新鮮で楽しく、物事を発展的に思考し、理論武装する姿を思い出しては惜別の念強くなるばかりであります。



りょうぜん天蚕の会 織り手
八島 恭子さん (伊達市)



天蚕ハイブリッド生糸と天蚕紬糸で織ったショール



織布を使ったハンドバッグ、懐紙入れ、名刺入れ、小物入れなどが商品化されている。ハイブリッド糸の使用量を増やせば、より求めやすい価格のものも作れそう

「多少値は張りますが、本物を望む人の需要はあるはず」と柳沼泰衛会長。地域の特産として根付かせることを目指す。その軌道に乗り始めていたところに東日本大震災・原発事故が起きた。汚染が懸念されたが「各国が設けている輸出規制値もクリア、問題なしでした。ただ、稀有な機会であることもあり調査を続け、さまざまなデータを取っています」



て糸にするか、みんなのアタマをひねりながらやってみたんです」と恭子さん。

養蚕の経験は役に立たなかった。家蚕は家の中で育てる、天蚕は外で育てる。家蚕は桑を食べるが、天蚕はクヌギやナラなど。「私たちはエゾノキヌギやナギを使ってます。柔らかくて天蚕が好むんです」。葉裏に絹毛があるこのヤナギを飼育樹として育てるところから始め、3年目で糸を取り、織る段階へとたどり着いた。

「今年で9年目に入りますが、ようやく注文に応じて織れるようになったところ」です。縦糸に天蚕ハイブリッド生糸を使うことで織りに弾みがついたのだという。ハイブリッド生糸とは、福島県農業総合センターが開発したハイブリッド工法



織りの前の「縦糸かけ」の研修風景。昨年から自前でかけられるようになり、全行程を一貫して会員の手でやれるようになった。「定年退職して入ってきた60代の若い方たちがやる気満々。ご夫婦でやってくれる方などすごく積極的で、必要な機械を手作りしてくれたり！」

で天蚕3に家蚕10の割合で繰り上げた、この会オリジナルの生糸。「家蚕の白い糸を道糸にして天蚕を紡ぎ合わせてゆく。これで均一な良い糸が取れ、しかも輝きとしなやかさという両方の良さを合わせ持った生糸がつくれるようになります」。この糸を縦糸に使い、やはり天蚕の会が工夫した紡ぎ方でつくった天蚕紬糸を緯糸にして、織り上げる。

こうして織り上げた天蚕ハイブリッドショールは、平成21年度県特産品コンクール入賞。翌年には天蚕を使った製品としては初めて、日本絹業協会「日本の絹」マークの使用が許可された。

「夢を語らなかつたら、これみんななかつたこと」と利幸さん。天蚕マユに含まれるセリシンという成分が



「織ってるときは無心になれるんです。そこに手足の動作がぜんぶ集中してる。すべてを忘れてるという感じ。和紙人形のときは想像力を切らすことができないので、終わるとクタクタという感じでした。それとは違うんです。これをしてほんとによかったなあと思います」

紫外線カットに優れていることがわかり、化粧品会社にも販売している。また卵の中で8カ月間眠り続ける幼虫体の研究から取り出した物質に、ガンの増殖抑制作用があることもわかった(平成23年発表・岩手大学)。「医薬品への活用がひらければ大きいですよ。大量の卵が必要になりますから。フィルム化して医療用に使えるという人もいます。天蚕は、万民救済の卵ということになるかもしれませんよ！」(笑)

「りょうぜん天蚕の会」同士たちの夢は膨らんでやまない。

天蚕で養蚕の技と誇りを復活させ 特産として根付かせたい！

霊山町掛田はかつて輸出ブランド「掛田折り返し生糸」の産地として、海外の地図にまでその名が刻まれていた。

「もって誇っていることだと思わなくて、知らない人が多すぎます。子どもたちは一応は小学校で習うんですけど」と恭子さん。でも子どもたちは「ふーん」という感じ？ 無理もない、実際に見る影がないのだ。

しかし夫・利幸さんは荒廃した桑園に夢をみた。遊休桑園で付加価値の高い「天蚕テンサンを育てよう」と。「私ら和紙工芸をやってきましたけど、糸についてはまったく素人です。思いつきの空想で書いた地域活性化の小論文が佳作に入選、1万円いただきました」と笑う利幸さん。その話を異業種交流の集いで披露したところ、「面白いから、ちよつとやってみよう」と食いついて来た人がいた。会長柳沼泰衛さんだ。興味を持った仲間ともども八島家に上がり込んで、夜のふけるのも忘れて話し続けた。

そして「話がピョンピョンピョンと跳ね上がって、1カ月後ぐらいに会ができたんですよ」と恭子さん。柳沼さんは福島県蚕種試験場の元場長、



天蚕のマユと天蚕細糸

養蚕研究の第一人者だ。話が早かった。利幸さんも事務長として駆け回った。天蚕とは日本古来の原産種でヤママユとも呼ぶ。その緑色のマユから取り出される糸は、野生の輝きと自然の風合いが魅力の、高級絹の材料だ。しかし育てるのも糸を取るのも、家蚕カサンとはまったく違い難しいのだという。「最初の年はとにかく試行錯誤でした。どうやって蚕を育てるか、マユができたならそれをどうやっ



プロフィール・八島 恭子さん

東京生まれ東京育ち。大学を卒業して製薬会社に就職していた夫・利幸さんと知り合う。ほどなくして、利幸さんは、故郷に新設される高校の教諭への転身を決め、霊山町掛田に帰郷する。同行して当地で結婚、昨年金婚式を祝った。

その後は主婦業に専念していたが、夫の大学時代からの趣味である和紙収集を生かそうと和紙工芸を学んで師範となり、自宅に開いた和紙工房で創作活動に打ち込む。平成17年、夫の思いつきが発端となって「りょうぜん天蚕の会」が発足すると今度は機織りを学び、織り手として会の生産活動を担っている。



「メリハリのきいた確かな実行力があるし、趣味も多彩で、宴会なども盛り上がりが凄いです！」と会と会員の活躍ぶりをたたえる八島利幸さん・恭子さん夫妻



エタラド・グリーン
薄緑色に光る糸で
霊山掛田の夢を織る

りょうぜん天蚕の会 織り手



やしま きょうこ
八島 恭子さん
(伊達市)

会員の活動スナップ



飼育樹エゾノキスヤナギの剪定作業



防虫剤散布作業



ハウスのネット掛け作業



山付け、ネット掛け作業で一休み



天蚕卵の山付け作業



クヌギの防虫作業の島貫さん、八島さん



県伊達農業普及所 藤田氏の指導



除草作業の菅野保雄さん、斎藤行應さん



繭収穫作業の皆さん



収穫繭の選別作業の皆さん



天蚕繭の糸紬研修の皆さん



天蚕卵の袋詰め作業 県より視察



繰糸作業の石塚さん 指導する八島さん



機織り作業の大原さん、指導の八島さん



母蛾検査 顕微鏡で伝染病菌の有無を検査



会計監査 会計高野さん、監査員健治郎さん



掛田小で繭工芸指導の八島事務局長夫妻

第20号 (令和6年3月17日発行)

春暖の候、皆様には益々ご健勝のことと存じます。

平成17年2月に設立した「りょうぜん天蚕の会」はこの度20年目を迎えました。これも偏に会員皆様の熱心な活動と設立以来伊達市、伊達市観光物産交流協会、大日本蚕糸会、野蚕学会、福島県関係機関等のご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

当会は天蚕の採卵、飼育、繭加工、糸紬、機織まで一貫した作業活動行っていますが、ここ数年来コロナ禍のため各種行事を縮小してまいりましたが、今年度は「紬」や「経糸掛・綜紬」の研修、地域活動や市内小学校で天蚕繭工芸や養蚕に関する指導等、従来の活動を行いました。また「天蚕まつり」を2回開催し、多くの来客から当会の活動、展示製品等に大きな賞賛をいただきました。

今年は設立20年を迎えたことから、会員一同、意を新たにさらなる発展を目指し努力したいと思いますので皆様のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。



令和5年度総会開催

3月19日(日) 午後3時より霊山町中川集落センターにおいて会員23名が出席し第19回総会を開催した。菅野会長の挨拶に引き続き伊達市霊山総合支所の宍戸康良支所長、福島県伊達農業普及所の渡邊敏弘所長と藤田智博氏より祝辞をいただいた。議長に大友靖子さんを選出し4年度事業報告と一般会計報告並びに5年度事業計画、予算案が原案通り承認された。

事業計画には新型コロナが治まる傾向にあることから従来の活動と販路拡大の推進を確認した。



山付け、ネット張り作業

4月23日(日)、会員17名で山付け作業とハウスのネット張り作業を実施した。女性会員は一袋に10粒入った種を飼育樹(エゾノキヌヤナギ)に4,000粒を山付けした。



5月9日(火)、遅く発芽した2棟のナラ、クヌギのハウスに菅野会長、八島利幸、八島時男、島貫の4名で1,000粒の山付けを行った。

繭の収穫作業

7月2日(日) 会員4名、7月9日(日) 会員7名が参加し、9時より「館ハウス」で繭の収穫作業を行った。2日(日)は大阪大学の高橋賢賢さんと大原理彩子さんが作業に当たった。

飼育樹のエゾノキヌヤナギが改植後に強風で苗木を痛めてしまったことや例年にない猛暑の影響で枯れる樹木が要因となり、収穫数減少は想定されていたが、八島時男会員、鈴木会員、上田会員の繭を含め、総数で1,900粒の収穫であった。



「天蚕まつり」を開催

9月30日(土)～10月1日(日)に伊達市梁川町の「まちの駅やながわ」、11月11日(土)～12日(日)は福島市飯坂町の「旧堀切邸」で開催した。令和元年以来3年ぶりの開催で「まちの駅やながわ」「旧堀切邸」は共に初めての会場であったが多くの来客があった。やながわ会場には伊達市長の須田博行様ご夫妻も来場され、来客と一緒にリース作りをされた。堀切会場は秋の行楽シーズンと重なり団体客が来場し大賑わいであった。中には長野県で天蚕を飼育しているご夫婦も来られて、偶然にも福島で天蚕関係者と話できたことを非常に喜んでおられた。新聞のイベント記事や電車内でのPR看板を見て来場した方が多くおり、今後の会場設定に一考できた。



↑ 令和5年11月5日 福島民報



↑ まちの駅やながわ

↓ 旧堀切邸



読売新聞が天蚕飼育活動を取材

7月10日(日)午後、読売新聞福島支局の小沼聖美記者が当会の活動取材のため八島事務局長宅に
来訪した。また、長野県御代田市の榎田氏と二本松市の佐藤氏も来訪し、天蚕について説明を受
けるとともに、八島時男会員のハウスで3齢から5齢の幼虫を観察した。
榎田氏と佐藤氏は学習指導を行っているので子供達を連れて成虫観察に伺いたいと希望されて成
虫の観察用に生繭10粒を持ち帰られた。小沼記者の取材記事は7月17日の朝刊に掲載された。



榎田さん 佐藤さん

小沼さん



↓ (令和4年7月17日 読売新聞)

やさしいもえぎ色の繭が、クヌギの葉にぐるぐるまると枝先にぶら下がっている。「天蚕」と呼ばれる日本産の蚕の繭で、屋内で飼育される「家蚕」の白い繭より一回り大きい。「きれいでしょう。身を守るため、木々に溶け込む色をしているんです」伊達市霊山町掛田の畑で、「りょうぜん天蚕の会」事務局長の八島利幸さん(86)が教えてくれた。紡がれた糸は、その美しい輝きと丈夫さから「繊維のダイヤモンド」と呼ばれる。ここでは天蚕を飼育し、織物や繭の加工品を制作している。一帯はかつて養蚕が盛んで、家蚕のエサとなる桑畑



飼育や繭回収皆で協力

りょうぜん天蚕の会(伊達市)



が広がっていた。だが、養蚕業の衰退とともに荒廃し、八島さんが霊山町内に約300あった遊休地の活用による地域おこしを提案。これがきっかけで、2005年に会が発足した。会長の菅野秀一さん(71)が、「荒れさせるより、地域ののために使ってもらえるなら」と土地を提供。いまでは約4000平方メートルの農地で、約40人の会員が協力

回収した繭から葉っぱやゴミを取り除く作業をする会員たち(10日、伊達市霊山町で)＝りょうぜん天蚕の会提供

して天蚕を飼育している。畑の整備から種付け、繭の回収、製糸。作業はみんなで集まって行う。手を動かしながらのおしゃべりが、地域の大切な交流の機会になっている。「良いやり方を工夫したり、日常の情報交換をしたりと、わいわいするのがとても楽しい。天蚕の様子を描いた歌や踊りもみんなで作ったん

会存続へ若者参加期待

明治時代初期、会のある同市霊山町一帯は絹糸の一大産地として知られ、「掛田折り返し生糸」というブランドが海外にも輸出されていた。日本初の養蚕伝習所や、機械技術の学校もあった。天蚕は家蚕と比べ、育てるのも糸を引くのも難しいとされている。初代会長を務めた柳沼泰衛さん故人は、県蚕業試験場の元場長で、繭から糸をスムーズに

して天蚕を飼育している。畑の整備から種付け、繭の回収、製糸。作業はみんなで集まって行う。手を動かしながらのおしゃべりが、地域の大切な交流の機会になっている。「良いやり方を工夫したり、日常の情報交換をしたりと、わいわいするのがとても楽しい。天蚕の様子を描いた歌や踊りもみんなで作ったん

です」と、菅野さん。他の産地との交流や糸の専門家を招いた研修、機織りや繭加工の体験会など、技術継承にも力を入れている。

地域の小学校では、天蚕の飼育設備を設け、八島さんらの指導のもとで飼育・観察を行っている。最初は幼虫の姿に悲鳴を上げていた子が、1か月後には「かわい」と喜んで手にのせるようになる。原発事故で屋外活動が制限されてから、活動は縮小したままだが、八島さんは「子どもたちは、本当は生き物に興味



八島利幸さん(右)と、織物などを担ぎ出す妻の幸子さん

ためにも、魅力をPRして若い力呼び込みたい」と話している。

津々。ふれあう機会を多く作ってあげたい」と話す。今年10日には、長野県御代田町から榎田拓哉さん(48)が訪れ、回収したばかりの繭や、ハウスで育つ幼虫を見て回った。榎田さんは地元で、子どもも放課後の居場所作りに取り組んでいるという。人間は自然と共生し、循環する営みを行ってきたんだと実感した。自然から与えてもらうことの感謝を、子どもにも伝えたい。目を輝かせた彼の言葉に、八島さんも菅野さんも大きくうなずいた。(小沼聖美)

「放射能移行実証試験地」の樹木整備を支援

1月19日(木) 鈴木静子会員が所有する浪江町の天蚕飼育場において、大阪大学高橋賢臣教授が「原発事故により汚染された樹木からどの程度天蚕・繭・糸に移行するか」の実証試験を行うため、菅野会長、八島事務局長、八島時男事業副部長がチェンソーを持参し伐採作業を支援した。高橋教授と研究生2名は仙台空港からレンタカーで現地に、また、三田村会員も駆けつけ、伐採木の片付けや整地を行った。原発事故後放置されたままのクヌギは樹径7～15cm、高さ10m程に成長し、樹木の周りや周辺は雑木・竹が繁茂し非常に難儀したが、4時間程で約4アールに45本の飼育樹木が確保できた。3月末にネット掛けを行う予定である。伐採整地したケ所の周りには昔ハウスがあって、鈴木さん一人で毎年3,000粒以上の繭を収穫したとのこと。竹雑木に絡まったキウイフルーツの枝を見ながら10数年前を顧みておられた。



たていとかけ そうこう 経糸掛、綜統の研修会を開催

10月14日(金)中川集落センターにおいて女性会員5名が集い経糸掛と綜統の研修会を行った。講師は当会会員の石塚裕美さん。石塚さんは米沢で製糸の研修で技術を習得し、機織りを長年実践しておられる。八島恭子会員が補佐役を務めた。初心者向けとして綜統の穴に容易に糸が通せるようにレース糸140本用いて経糸(幅約10cm)とした。スチール製の機織り機に経糸を掛けて参加者それぞれ2～3cm機織りを行い、一連の流れを体験した有意義な研修であった。この研修会は新型コロナの流行のため中止となった「天蚕まつり」に代わるものとして、また、昨年実施した電動フライヤーによる紬ぎ研修がコロナ流行のため講師の下村輝氏が来福出来なくなったため、会員同士の交流の場を設けたいという要望に応えるものとなった。また、泉原養蚕資料室に保管されている「足踏み式糸紬機」を「電動化」できないものか担当職員に見てもらい下村氏に相談したが、ガイド装置が不足しているので不可能と診断された。

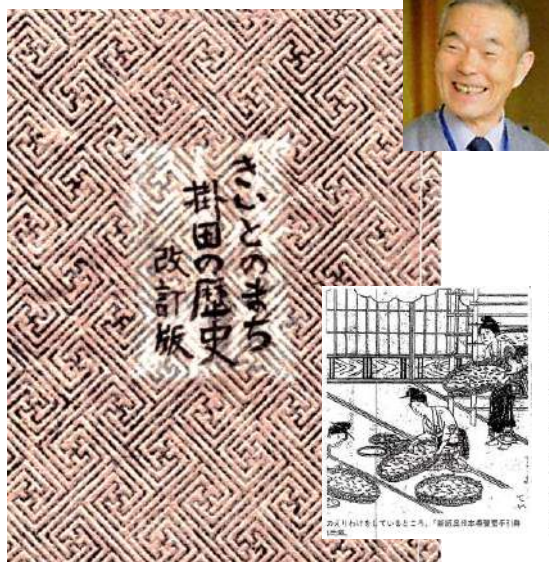


幅1cmに約10本の割合で糸を通す細心の作業 ↑

「きいとのもちー掛田の歴史」改訂版を発行

当会「りょうぜん天蚕の会」の八島利幸事務局長はこの度標記「きいとのもちー掛田の歴史」の改訂版を発行しました。当書は昭和30年(1955)に発行されたものですが、八島さんが前会長の柳沼泰衛氏から複写本を頂いていたもので「郷土の歴史と先人達の養蚕研究に尽くした偉大な足跡」を知ってもらおうと令和3年11月発行されました。幕末から近代まで養蚕業の繁栄が克明に記録されており明治期に横浜と並ぶ「日本の掛田」が読み取れます。

当書は天蚕の会員全員に贈呈されます。霊山町養蚕業の変遷を顧みましょう。



製本表紙は八島工房の和紙です。(A4版)

掛田自治協議会
りょうぜん天蚕の会
問い合わせ先 〇二・五五・二五五(天蚕の会事務局)
八島 利幸
〇二・五五・二五五(霊山中央交流館・大友、渡辺)

令和三年十一月吉日

「きいとのもちー掛田の歴史」が発行されたのは、戦後間もない昭和三十五年(一九五五年)、福島県歴史教育者協議会編、福島県史学会からである。国の小学校・中学校の社会科・歴史教育の指導要領改訂に当り、県北地区教員たちの課題解決の一助として研究され、まとめられたものであります。

この本の再発行を思い立ったのは「りょうぜん天蚕の会」前会長柳沼泰衛氏(元福島県養蚕試験場場長)より複写本を頂き、この郷土史研究書を是非とも現町民にも読んで頂き、わが町の先人達のたゆまぬ養蚕研究に心を尽くした偉大な足跡を知ってもらわねばならぬと強く思いました。更に、戦後間もなく、この貴重な研究書は小生が掛田小・中学校在学時の恩師達が勤務の傍ら学習指導研究に励みつつ私達を導いてきたことに新たな感謝と感謝の念を懐きました。

当初、原本を忠実に書き写しての再発行が基本と考えました。しかし、文中に①誤植②誤字③史実誤認(地名)④旧漢字等が多く散見され、現代の人々に判読しがたいので、「福島県歴史教育者協議会」のご理解を得、それらの箇所を改訂し発行と致しました。

事実、小生のパソコンに内蔵されていない漢字が多く「大辞源」片手の書き・作字に時間を要しました。但し、本文に取りあげられた資料等の漢字は忠実に原本通りの旧漢字を用いるよう心がけました。

全頁の複写(コピー)が容易い製本ですが、物質不足の粗悪な洋紙・ラバン紙に印刷された製本(裏表紙等に添付された写真参照)の為、本文中に取り入れられた多くの写真・図版が黒く変色し判読し難い同様の図版は県史雑誌「ふくしまグラフ」(二〇〇九春)「グラフうつし」(二〇〇五春)「ひらく」(二〇〇七春)各号に掲載図版から了承をえて取入れ、判読不明図版は省略した。また、表紙と裏表紙等は発行当時の姿を伝える時代感、編者の意図を汲み取る為に複写して製本とした。

改めて垂種本場「きいとのもち」に取りあげられた素晴らしい先人達の努力を偲び、専ら研究をされた方々に感謝し、全町民が関わる「掛田自治協議会」と養蚕の技術継承に努める「りょうぜん天蚕の会」が共同改訂版として発行した次第です。

町内に養蚕史跡が尚数多く残っているのも、これらも伝えられるようにしたいものです。読後、読者の皆様からご指摘やご意見を頂ければ幸であります。

改訂版を発行するにあたり

下村撚糸(竹箴保存会会長)社長親子来訪

6月26日(土) 京都市の『古式竹箴守る会』会長下村輝氏親子が来訪し、天蚕の飼育観察をした。彼らは福島市平野の養蚕家鈴木美佐子氏への用件で来福されたものであるが、日本野蚕学会で柳沼前会長と同席された際、以降「エゾノキヌヤナギ」による天蚕飼育観察の機会を持たれていたとのことである。下村氏は30年程前に染織専門雑誌に「天蚕飼育の現状と天蚕糸の利活用」の論文を掲載され織物協会より褒賞された。天蚕の将来性に警鐘と展望を書かれたほど野蚕と製糸に関心を寄せられている方です。

来訪早々事務局長宅で天蚕繭の圧力釜で煮て真綿化する技法と実に簡易に紬繰糸できることを実演してもらった。その後日にはその技法を映像化したDVDをお送りいただいたことから、これを今後の当会の研修に活用したい。

下村氏は、天蚕の特徴は「繊維のダイヤモンド」と称されるように「うす緑の輝きと丈夫さ」に特徴があり、うす緑の色はやがて退色するので、最初から二大特徴を目指すシンプルな方法で天蚕紬繰糸ができるので低価格を目指すことが出来るとの示唆であった。

下村氏から「切り繭の真綿化した天蚕糸」が届く

6月26日(土)に 京都の「下村撚糸」代表の下村輝氏とご子息の祐樹氏が来訪された際、当会の「切り繭」「汚れ繭」「繭層の薄い繭」が沢山あると申したところ、「是非預らせてほしい」と1キロほど持ち帰ったものが330gほどの見事な紬糸になって届いた。

切り繭や汚れ繭(出がらし繭)がこのように立派になるのであれば「当会員に是非とも教えてください」と依頼したところである。ここに来福の際の研修会開催の確約を得たところである。

天蚕繭と家蚕繭の「紬研修会」を実施

11月27日(土)午前9時から終日、中川集落センターにおいて、京都の「下村撚糸」代表の下村輝氏(竹箴(たけおさ)保存会会長)とご子息祐輝氏、染織者(weavers nest (ウェーベズネスト))の竹内禮子氏の協力の下、天蚕・家蚕の繭紬研修会を実施した。下村氏が春に八島事務局長宅を来訪の折「多くの切り繭と汚れ繭がある」と言うのと「それを真綿化し紬糸になる」と申されたので「天蚕紬研修会」の開催案が提案された。このことにより今回コロナ禍も一応収まった頃合いを見て実現したものである。

午前と午後に分散しコロナ対策を講じながら会員13名、会員以外22名の合計35名の参加を得て開催した。当初の予想を超える参加者となったが、簡易紬機『電動フライヤー』4台を駆使して紬製作に取り組んだ。小学生でも無理なく作業できることから参加者全員感心したところであり、企画初期の目的が十分達せられたことは喜ばしい限りである。



DVDにより紬の全国事例を鑑賞する参加者



八島事務局長 竹内禮子氏 下村輝氏

講師を務められた下村氏は保原の真綿も後継者不足となり、結城紬製作者の減少の中にあり、このままでは日本の伝統産業である絹織物の保存に危機感を抱いていると言う。その現況下にあって「天蚕繭」の生産、会員が手紬糸づくりから織物に至る製品化に一貫して取り組む当会の活動に大変関心を寄せられていた。簡単な方法による糸づくりが普及すれば天蚕糸・布がより安価な価格で製品を消費者にお届けできると、その普及に期待を寄せられている。

また、参加された方から、14年前に当会が主催した「全国天蚕セミナー」の再開企画をよせられたことは大きな支えとなった。

福島民友 11月30日→



紬機「電動フライヤー」により天蚕繭の紬実習(天蚕の青染試材)



真綿を伸ばし久米島式用具に掛け「フライヤー」に導く

しらたかまち

白鷹町天蚕の会から「天蚕布」完成のたより

5月13日山形県白鷹町の「白鷹天蚕の会」事務局から「りょうぜん天蚕の会」から天蚕卵の提供のお陰で天蚕布が完成したという山形新聞の記事のコピーを添えてお礼の手紙が届いたので紹介します。

(山形県白鷹町 須田 瞳 さんより)

「りょうぜん天蚕の会」の皆様ご無沙汰しております。新型コロナウイルスの感染拡大により県境を越えての移動はもとより様々な活動が自粛されています。東北地方では新たな感染者もなくなり落ち着いてきたように思いますが会員みなさんもお変わりなくお過ごしでしょうか。山形県でもこれまで約70人の感染が確認されましたが白鷹町内での感染者はなく、天蚕の会では今年の活動に向けて先月から動き出したところです。

ご報告が遅くなってしまいましたが、おかげさまで、昨年の繭の収穫で4反目の「白鷹天蚕紬」が完成し2月に銀座の呉服屋「もとじ」に納品することができました。目標としている一年に一反の完成はなかなかできずにいますが、4反目も「りょうぜん天蚕の会」より支援をいただいたおかげで完成できたものです。たいへんありがとうございました。こちらが助けていただいていたばかりですが、今後とも交流を続けていただければ幸いです。

今月末で首都圏の非常事態宣言も解除になるとは思いますが、一日でも早く日常が戻ることを願っています。「りょうぜん天蚕の会」の皆様もお体を大切にお過ごしください。そして、またいつか皆さんで深山においでください。

山形新聞 3月23日→

白鷹
白鷹町で、希少価値の高い天蚕糸と反物作りに取り組む「しらたか天蚕の会」(須田信一会長)が4反目を制作した。天蚕の卵や繭の“不
作、に苦勞しながらも、福島県の団体の助けもあり生産の流れをつないだ。完成品は2月中旬、東京・銀座の呉服商に納められた。

「天蚕の会」が4反目制作

天蚕はヤマモリガの幼虫。一般的な蚕(カイコ)と違い、屋外でクヌギなどを食べて育つ。繭

糸は薄緑色で反物はベージュ色。飼育は気候や動物の影響を受けやすく、糸の量は一般的な蚕に比べ少ない。同町では深山地区の畑で、住民や機械で織り出される。同会が2012年から飼育、繭からの糸取り、機械織りで、貫して担っている。幼虫の一部は成長させて卵を採取し、翌年の飼育につなげている。

4反目に向けた生産では、18年に飼育を試みた卵の出来が悪く、急きょ福島県伊達市の生産団体「りょうぜん天蚕の会」から卵を譲り受けた。成虫に育てたが繭が少なく、辛うじて19年分の卵を確保。19年は繭約2500個から糸を取り、過去の生産分と合わせ、町内の小松織物工房が長さ13m、幅40cmの反物に仕上げた。

着物にすれば1着数百万円の高級品。須田会長は「一時は心配したが、19年産の繭が想像以上に大きく、多くの糸を取ることができたと完成に胸をなぐ下ろしている。(五十嵐 隆)」



白鷹町産の天蚕糸で制作された反物。銀座の呉服商に納められた

“不作”に負けぬシルク

福島から卵譲り受け、生産つなぐ

この印刷物の文章・写真等の著作権は山形新聞社が保持しています。無断転載、複製及び頒布は禁止します。

白鷹「天蚕観察会」を開催

(白鷹町 須田 瞳 さんからメール)

7月27日(月)町内の2つの小学校の3年生が「天蚕観察会」の圃場を訪れました。写真はその時の様子です。また、今週は置賜農業高校の生徒も見学に訪れます。



繭の収穫作業

7月12日(日)午前9時半より曇り空の下、会員16名が参加し今年度初の繭収穫作業を行った。今年は6月下旬から天候不順が続いた上に、コロナ感染防止のために飼育期間中の作業にも影響したため減収となった。しかしながら二本松市の鈴木会員(980個)、飯坂町の島貫会員(146個)、郡山市の大山会員(165個)、掛田の八島時男会員(780個)などが小規模な家庭菜園的飼育ながら回収率80%に近い状況は特筆に値する。

特に八島時男会員の新ハウス1棟は昨年度より育てた飼育樹エゾノキヌヤナギの樹勢が良く、マダラカミキリの被害が全く無かったことによると思われる。菅野会長から反省点として共同飼育ハウス内の①側板の更新、②飼育樹の改植、③防草シート敷設など飼育ハウスの整備が提案された。また、総会時に八島事務局長から報告があった野鼠対策が緊急の課題である。



収穫繭の塵取り作業の八島恭子さん、八城さん



八島時男さん、島貫さん、河田さん、石塚さん

母蛾検査を実施

11月15日(日)9時から中川集落センターにおいて会員12名が参加し母蛾検査を実施した。今年は天候不順もあり牡・雌蛾の成虫羽化の時期が大いにずれ込んだためペアリングできた個体数は52であった(昨年85)。検査の結果疑わしい物は皆無であった。



←顕微鏡で検査中の三田村さん、八島時男さん

母蛾粉砕中の河田さん、八島局長、大山さん、
柳沼佐奈枝さん、斎藤義治さん、鈴木静子さん、
斎藤慎一さん、八島恭子さん ↓



「冬虫夏草」から新物質
細胞成長促進し認知機能改善

【ナトリドの作用メカニズム】

ナトリドは、細胞成長促進作用があり、認知機能改善に効果的である。ナトリドは、細胞成長促進作用があり、認知機能改善に効果的である。ナトリドは、細胞成長促進作用があり、認知機能改善に効果的である。

ナトリドは、細胞成長促進作用があり、認知機能改善に効果的である。ナトリドは、細胞成長促進作用があり、認知機能改善に効果的である。ナトリドは、細胞成長促進作用があり、認知機能改善に効果的である。

八島事務局長『天蚕^{よもやまばなし}四方山^{しやうさん}嘸^ふ』を講話

6月13日(木)飯坂温泉「山房月の瀬」において、県蚕糸OB会の席において八島事務局長が天蚕の会発足の経緯等について講話した。



県蚕糸OB会で講演する八島事務局長

和紙工場の立場から原料の楮不足は桑園の荒廃によるものと判明したこと、霊山町の遊休桑園300ヘクタールもあることから、その桑園に替わる天蚕育成圃場への提案＝県北地方振興局懸賞小論文入選＝に至り、その発表5年後、柳沼泰衛氏との運命的出会いとなったことなど、和紙と天蚕作品を展示して講演し好評を得た。

大阪大学教授が再来訪

3月29日(金)大阪大学核物理研究センターの東崎昭弘教授、青井教授、高橋講師と2名の女性研究生が来訪し、菅野会長宅と八島事務局長宅において懇談した。一行は阪大を中心に福島大学、仙台の尚絅学院大学、岐阜大学、高知工芸大学の学生ら飯館村の土壌調査や山林汚染等を研究している。東崎教授は私たち天蚕の会が「卵から布製品に至るまで一貫作業」をしていることに関心を持ち、昨年9月にも来訪している。



岡田さん、長坂さん、青井教授、東崎教授、高橋講師、八島事務局長



八島恭子さんの指導で全員機織りを体験



天蚕 腹部を上にして食事中 間もなく結繭する時期。飼育樹エゾノキヌヤナギの枝葉を支えに天蚕の繭。【ほぼ実物大です】

会員の活動スナップ



4月20日 山付け作業 満開の桜を見ながら、畑の中の仮設でお茶を楽しむ天男天女の皆さん

「霊山こどもの村」で天蚕繭工芸

6月16日(日)「霊山こどもの村」において恒例となった繭工芸品製作指導を菅野会長はじめ6名で行った。相馬市から80名の団体が来場し、熱心に動植物や想像上の生物製作に取り組んだ。中には幼稚園児と思われる幼い子供が難しい工作に挑戦し苦慮している様子がほほえましかった。

完成した繭工芸品に満足して親子共々笑顔で話が弾んでいるのを見ると指導の甲斐があるというもの。また、天蚕の幼虫3匹を飼育樹に這わせ近くで観察できるよう図った。



滋賀県草津市小学生が繭工芸に取り組む

8月5日(月)「霊山こどもの村」紅彩館において、伊達市の特産品「天蚕繭」を利用したコサージュづくりが開かれた。震災以降、伊達市と他県小学生との交流事業が行われているもので、今年は草津市の小学6年生26名とボランティア大学生5名の計31名が来所した。生徒たちは繭の中から大きな蛹を取り出すたびに「キャーキャー！」と驚き騒ぎながら挑戦していた。繭花の中にもう1つの花を付けたり、花芯が大きく飛び出したり、大人には想像もつかない作品を作っていた。

霊山登山と共に良き思い出づくりに役立ったようである。天蚕の会から川辺、大友、八島夫妻がその指導に当たった。草津市の小学6年生への指導の様子



道の駅「伊達の郷りょうぜん」に天蚕品展示

3月22日(木) 午前10時から24日にオープンする道の駅「伊達の郷りょうぜん」の天蚕展示スペースに菅野会長他4名(八島事務局長、八島時男、八島恭子、川辺)で天蚕品の陳列を行った。十数種のブースでは関係者が慌ただしくも思いのレイアウトで商品を並べていた。

東北中央道路(霊山 IC)は3月10日に開通しており、大勢の来客を期待したい。

3月24日オープンの道の駅「伊達の郷りょうぜん」→



各ブースの作業状況 (正面玄関を入り左側に天蚕ブース↑)



天蚕製品の展示状況

大阪大学教授が来訪

9月3日(月)大阪大学核物理研究センターの東崎昭弘氏と藤原守氏の2教授が本会に来訪し、菅野会長と八島事務局長宅において懇談した。

両氏は阪大を中心に福島大学、仙台の尚絅学院大学、岐阜大学、高知工芸大学の学生ら飯館村の土壌調査や山林汚染の時系列、福島F1の見学、山津見神社の狼天井絵の歴史と焼失後の推移の学習等を主導している。三春町福聚寺で玄侑宗久氏の講義を受講した際に天蚕飼育活動の話題になり、どのような形で学業に組み込むことが可能か考えたいとのことである。

天蚕の会の活動に「予想を超えて感慨深く、興味をそそられた。蚕業の細かい確たる道を探る日々の研鑽に頭が下がる」と後日コメントメールをいただいた。



奥が藤原氏 手前が東崎氏

白鷹町天蚕の会員来訪

6月23日(土)山形県白鷹町天蚕の会の加藤栄一氏と新野孝一氏が天蚕飼育状況視察のため館ハウスに来場した。白鷹町では飼育樹(クヌギ)の芽吹きが遅かったため山付けの調整に苦慮し、「天蚕卵」の譲り受けを依頼された。

白鷹町天蚕飼育場視察へ

7月1日(日)山形県への所要の帰路、白鷹町天蚕の会の飼育場に伺い、23日に提供した霊山天蚕卵の孵化状況を視察した。



加藤栄一さん、八島さん、新野孝一さん



須田会長、加藤栄一さんの奥様

新聞記事②

河北新報(本社仙台)角田支局記者が取材に来訪。「阿武隈川」流域の歴史と文化、産業として
 本会活動が紹介された。(30年11月17日(土)の記事)

阿武隈川物語

流域の歴史と文化

⑦

天蚕原発事故を超え

もえぎ色の繭と糸の美しさに目を奪われた。「緑のダイヤモンド」と呼ばれる天蚕Ⅱ。白い繭とひと味違う自然の神秘を感じさせる。

伊達市霊山町掛田の地域おこし団体「りようぜん天蚕の会」事務局長の八島利幸さん(82)は「糸が自然にあやを成し、織ると天然の景色が生まれる。光の反射が多様で、光沢が美しい」と魅力を語る。阿武隈川流域の養蚕地帯の一角である掛田の生糸は戦前、「掛田折り返し糸」のブランドで輸出された。横浜市に次いで2回目の生糸繭共進会も1881年、掛田で開かれた。

風評被害に苦悩

養蚕が衰退する中、八島さんが「遊休桑園を生かして地域を活性化できないか」と考えたのが天蚕だ。2005年に会を結成。飼育から糸取り、機械織りを行い、反物や小物アクセサリーなどを制作する。天蚕はハウスにネットを掛

第4部 養蚕

⑤ 緑のダイヤ



「緑のダイヤモンド」と呼ばれる天蚕。野外の木で飼育される

けて鳥や虫から守り、クヌギなどの木に卵を付けて育てる。野外飼育のため、東京電力福島第1原発事故の風評被害を受けた。「糸に放射性物質が含まれている」と誤解されたのだ。霊山町など市内の一部は当時、特定避難勧奨地点が点在していた。原発事故で二本松市に

天蚕 日本原産の野蚕。「やまこ」「やままゆ」とも呼ぶ。蚕の糸より軽くて柔らかく、糸を織るには熟練の技が必要とされる。長野県安曇野市で江戸時代中期に飼育が始まったと伝えられる。



もえぎ色の美しい繭と生糸。黄色の繭ができることもある



避難。4年前、二本松に家を建てた。近所にハウスを借り、天蚕を飼い続ける。自宅のあ

る浪江町権現堂地区は昨年、避難指示が解除されたが、一人で帰還するのは難しい。「虫を見ていると心が癒やされる」と言う鈴木さん。「そ

「命の美 後世に」

阿武隈川沿いの宮城県丸森町耕野の染織家石塚裕美さん(51)は一昨年秋季に入会した。石塚さんの願いだ。

「原発事故前、地域には自然と共に生きる生活があった。かけがえのない命の美しさを子どもたちに伝えたい」。

ふくしまは負けな

鮮やか繭製品 開発中

天蚕の会、ショールやバッグ



天蚕の繭糸と製品を紹介する
菅野会長(左)と八島さん

伊達市霊山町の「りょうぜん天蚕の会」は、鮮やかな色合いの繭糸を使った天蚕の繭糸を使った製品を開発している。天蚕はヤマモリガの幼虫で、日本産の野生繭糸虫。天蚕に飼ひ上、産卵する数をはかり比べて、少ない繭糸を育てる。天蚕はヤマモリガの幼虫で、日本産の野生繭糸虫。天蚕に飼ひ上、産卵する数をはかり比べて、少ない繭糸を育てる。

伊達市霊山町の「りょうぜん天蚕の会」は、鮮やかな色合いの繭糸を使った天蚕の繭糸を使った製品を開発している。天蚕はヤマモリガの幼虫で、日本産の野生繭糸虫。天蚕に飼ひ上、産卵する数をはかり比べて、少ない繭糸を育てる。

古里トピッ

てのめが難しいとされる。繭糸は、クマギなどの葉を食って、鮮やかな色合いの繭糸を作る。繭糸から採れる美しい糸は少量のため、繭糸で「繭のダイヤモンド」とも呼ばれる。天蚕の繭糸は、ショールやハンドバッグ、ネックレスなどがある。伊達市のふるさと納税礼品にも指定され、全国から需要を集めている。

会長の菅野「さん」と八島さんと、天蚕の繭糸を使った製品を開発している。天蚕はヤマモリガの幼虫で、日本産の野生繭糸虫。天蚕に飼ひ上、産卵する数をはかり比べて、少ない繭糸を育てる。



天蚕「昨年以上収穫を」

霊山の有志 ハウスのネット掛け

天蚕「昨年以上収穫を」霊山の有志 ハウスのネット掛け。天蚕はヤマモリガを飼育し、繭糸を使ったクマギやシルク製品作りなどを行っている。「りょうぜん天蚕の会」は、伊達市霊山町にある天蚕の飼育場でハウスのネット掛けを行っている。飼育環境を整え、天蚕が繭糸を吐き出すのを待つ。天蚕はヤマモリガを飼育し、繭糸を使ったクマギやシルク製品作りなどを行っている。「りょうぜん天蚕の会」は、伊達市霊山町にある天蚕の飼育場でハウスのネット掛けを行っている。飼育環境を整え、天蚕が繭糸を吐き出すのを待つ。

福島民友 5月3日 ↓

「天蚕」で地域振興へ



りょうぜん天蚕の会が展開するさまざまな商品

伊達市霊山町の任意団体、りょうぜん天蚕の会。天蚕はヤマモリガの幼虫で、日本産の野生繭糸虫。天蚕に飼ひ上、産卵する数をはかり比べて、少ない繭糸を育てる。天蚕はヤマモリガの幼虫で、日本産の野生繭糸虫。天蚕に飼ひ上、産卵する数をはかり比べて、少ない繭糸を育てる。

将来の法人化視野

伊達・霊山の団体

伊達市霊山町の任意団体、りょうぜん天蚕の会。天蚕はヤマモリガの幼虫で、日本産の野生繭糸虫。天蚕に飼ひ上、産卵する数をはかり比べて、少ない繭糸を育てる。天蚕はヤマモリガの幼虫で、日本産の野生繭糸虫。天蚕に飼ひ上、産卵する数をはかり比べて、少ない繭糸を育てる。

県農業総合センター研究員が害虫捕獲に来訪

5月21日(日)福島県農業総合センター果樹研究所の荒川病虫害科長(農学博士)他2名が館ハウスの害虫捕獲に訪れた。試験場のリンゴ、ナシ等の木に放ち、樹木への影響と農薬の効果等を研究するためとのこと。1時間ほどでマイマイガ約800匹を捕獲し専用ケースに保管した。

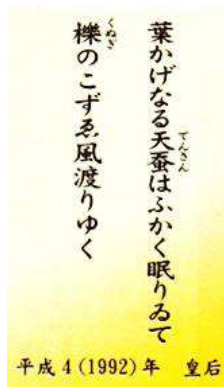


菅野研究員 荒川科長 吉田副主任研究員



捕獲したマイマイガの幼虫

皇后さま 象徴のうた (平成という時代)



「天蚕」と呼ばれる蚕の卵をクヌギの木につけられる皇后さま。左は紅葉山御養蚕所主任だった故麻枝貴和さん＝2007年6月4日、皇居・紅葉山御養蚕所（宮内庁提供）

皇后さまには蚕の歌が多いが、掲出歌は、平成4年の歌会始で「風」というお題のもとに詠まれたもの。やはり、日本古来のものを残したいという気持ちから、紅葉山では天蚕も育てられている。天蚕は桑ではなく、標の葉を餌とするが、天蚕の卵を標の枝につける作業は「山つけ」と呼ばれ、これも皇后さまのお仕事である。葉を食べる天蚕の音も絶えず、その深い眠りを撫でるように風が渡っていく。印象深い一首である。一般的にはあまり知られることのない皇居のうちの作業のなかで、日本古来の伝統が息づいている。

3月1日の福島民報、福島民友の各紙に掲載された「象徴のうた」に美智子皇后さまが平成4年の歌会始で詠まれた歌が紹介されました。「風」というお題のもとに「天蚕」が詠まれています。

天蚕「ふるさと納税返礼品」好評

29年度より伊達市ふるさと納税返礼品に選定され3月末にネットに乗ると直ちに注文があり納税者にハンドバッグを送付した。その後も、月平均1個の割合でショールとハーフショール、ハンドバッグ等送付している。

ふるさと納税返礼品の高額化が問題視されて納税の2割程度の返礼品と総務省は勧告したが返礼品目当ての納税者が多いことに相対して、還付金への関心も高まっている表れであろうか。

この期に、本を求めに全国の返礼品を閲覧してみたが大半が地域の果物や海産物、地酒とか飲食品が多く登録されており、工芸品の登録はこけしや陶器・漆製品等10%程度にとどまるなど少ない。「天蚕製品」の登録は当会が全国唯一であった。

伊達市返礼品カタログP.7(伊達市産業部商工観光課)より→



新製品の試作



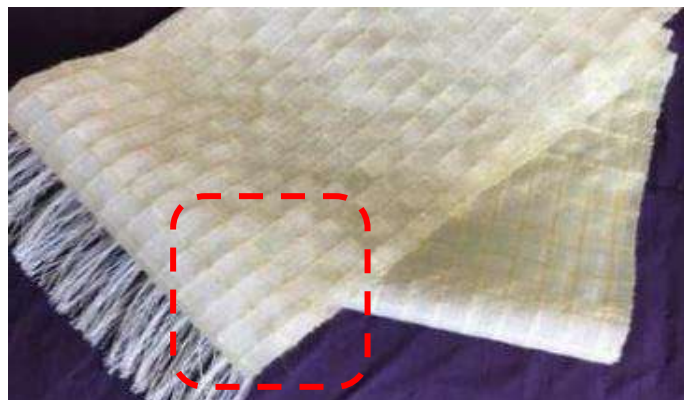
髪飾り リース(上段) コサージュ



ブーケ(直径30cm 豪華)



巾着型匂い袋



井桁模様のショール。立体感を出すことを試みました。



左の赤枠部を拡大したもの。織細さが見て取れます。

伊達市東京見本市に出品



10月24日(月)～25日(火) 東京で伊達市特産品の展示会が行われた。展示会には当会の天蚕ハンドバッグやショール、アクセサリ等10数点出品して参加者の注目の的となり質問が相次いだ。

この注目度から伊達市の「ふるさと納税の返礼品」に数点選ばれることになった。高額納税者には納品期間を延長してでも天蚕商品を勧めたいとの市の担当部局の意向である。

天蚕品が伊達市「ふるさと納税返礼品」に登録される

10月行われた「天蚕まつり」や東京で行われた「特産品展示会」での利用者の好評に応じて伊達市の「ふるさと納税」の返礼品に10点程登録された。

ふるさと納税は年々認知度が上がると共にその返礼品が評判となっている。

しかし、多くが果物や牛肉などの食料品に限定され季節限定品となっているので「他の市町村には無い物」という市担当部局の発案から今回の運びとなったもの。29年度よりインターネットで「ふるさと納税ナイス・チョイス」で商品紹介されます。ご覧下さい。

伊達氏発祥の地 伊達市ふるさと納税寄附金

伊達応援寄附金

●特典●
伊達市への応援として寄附額5,000円以上をお寄せいただいた方に下記の返礼品をお送りします。

寄附額	返礼品
5,000円以上 30,000円未満	①季節の果物(年1回) (2月～7月申込(入金確認の場合)) ○桃4個程度 (※8月発送予定) または (8月～1月申込(入金確認の場合))
30,000円以上	②伊達市ふるさと納税 ③紅毛漬

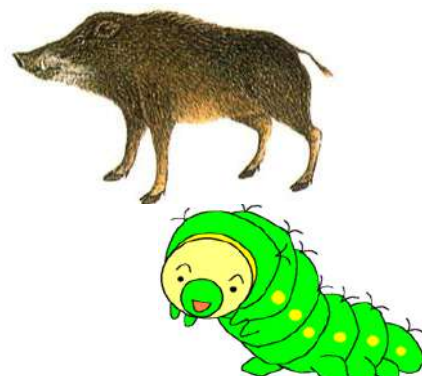
イノシシ

猪の皮と天蚕布とのコラボ商品を試作

前会長の柳沼泰衛氏が「農作物を荒らす猪は有害獣として捕獲されて処分されるが、猪の皮と天蚕とのコラボは出来ないものか」と良く言っておられた。八島事務局長は「あのままではワイルド過ぎて硬い皮では華麗な天蚕布とのコラボは合わない」と疑問視してきたところ、この度、霊山森林公社では「猪皮を染色し鞆皮とすることにより多様性が増した」との話があったことから、天蚕布とのコラボ製品として早速「金封タトウ」を試作してみた。落ち着いた藍色の鞆皮と天蚕布に違和感はなく、手にした方々からは大評判であった。

また、黄色に染めた猪皮の裏地に天蚕布を施した財布も「粋な財布」として愛用されそうだ。

猪皮も天蚕布も共に霊山産というところに作品に物語性が伴い、他地区には見られない特産品になると思われる。



天蚕繭の収穫作業を実施

7月3日(日) 午前9時半より15名が参加して今年第1回目の繭収穫作業を行った。

餌不足等による幼虫の移動が無いように今年は山付けを10,000粒に制限した。だが孵化率が低かったことから回収率は33%(繭の収穫数は3,340個)であった。

ところが繭の枝吹きが良好だったので第3回目の山付け(2,480粒)も同時に行った。

2回目の収穫作業は7月16日(土)に八島時男氏ハウス、大橋亮治ハウスで行った結果 計6,050個となった。さらに3回目の収穫ができたので合計7,000個と最良となった。

霊山で天蚕の繭を収穫

天蚕(ヤママユ)を飼育し、繭玉を使ったアクセサリーやシルク製品づくりなどをしている、「りょうぜん天蚕の会」(菅野秀一会長)は3日、伊達市霊山町にある天蚕の飼育ハウスで繭の収穫作業を行った=写真。約25人が参加。約5千個の繭を採集し、アクセサリーなどの工芸品用や絹糸用、子どもたちの工作用などに選別した。飼育ハウス内の樹木に、天蚕の卵が入ったネットを取り付ける「山付け作業」も行った。



福島民友新聞 (7月7日)

伊達市霊山町のりょうぜん天蚕(てんざん)の会は三日、同町中川地区の飼育ハウスで天蚕繭の収穫をした。
菅野秀一会長は二十人が参加した。参加者は天蚕がさなぎとなり、エノキヌヤギに取りつけた繭い緑色の繭を一つ一つ丁寧に取

ていった。この日の作業で約六千個の繭を集めた。
同会は日本固有の天然の蚕飼育を通して地域おこしをしている。繭からはもえき色の生糸が取れる。生糸で織られた天蚕布はハンドバッグやショールなどに加工される。

天蚕繭6000個を収穫



薄緑色の繭を手にする会員

福島民報新聞 (7月9日)

日本野蚕学会にて作品展示

10月28(金)~29日(土)の両日、岩手大学「盛岡市産学官連携研究センター」で第22回日本野蚕学会が開催され、菅野会長、瓜田副会長、三田村会員が参加した。

瓜田氏は「カイコ及び野蚕セリシンパウダーの効率的な抽出法」、三田村氏は「天蚕奄美以南亜種の生態解明」他について研究発表するとともに司会を務められた。

ロビーの展示会場には14団体から出展があり見事な商品が並び質問説明で賑やかであった。

当会からは「ハンドバッグ」「ショール」等を展示、作業活動を説明した。特に「卵から製品に至るまで一貫作業」を我々会員が行っていることに大勢の方からお褒めを頂いた。



研究発表会場



ロビー展示会場

霊山町文化祭に展示

10月29日(土)~30日(日)の両日開催された霊山町文化祭に天蚕品の協賛展示を行った。

展示説明には八島事務局長と八島時男会員が行い、高価な帯展示に感嘆の声が上がった。

また「このような機会でないとは購入できないから」と来場者の一人はアクセサリー4点を購入いただいた。



ハウスのネット張りと天蚕山付作業

4月19日(日)午前9時から館ハウスにおいて、会員23名が参加して20棟のハウスのネット張りや天蚕約2万粒の山付作業を行った。満開の桜を望みながら終始なごやかな作業であった。多忙な中、県会議員の佐藤金正氏がお越しになり励ましの言葉をいただいた。



かんの

管野まひろさん ヤママユガ研究で「特選」

平成27年度の夏休研究で、保原小学校4年2組の管野まひろさんが「ヤママユガ(天蚕)の研究」で福島県理科作品展「特選」に選ばれた。

6月27日の繭収穫作業に家族でお出でになり収穫と選別作業を体験したお嬢さんである。この「天蚕の会だより」編集に際し、研究の動機について次のように寄稿していただいた。

『私は生き物が大好きです。小さい虫から牛などの大きな生き物まですべてにきょうみがあります。小さな虫との出会いから天蚕の会の皆様と出会うことができ、今回とても良い研究ができました。ありがとうございます。私がヤママユガを研究したいと思ったのは、人間はたくさんの生き物を食べたり利用して生きています。それから人間の技術は発展していろいろな物を作ることが出来るのに、小さな虫が作り出す糸「天蚕糸」をまねて作るのはまだ出来ていないという事を知ったからです。そんな虫はどんな虫なのか、たかが虫一匹といえはそれまでですが、何でも出来る人間がすばらしいと言う「緑色のダイヤモンドと呼ばれる天蚕糸」を作り出すヤママユガの一生を自分なりに追いかけてみました。自分にくらべれば小さくてちっぽけに見える生き物が大きく人間の生活に関わっている事実におどろかされました。今回の研究で新しい疑問がたくさん出ました。続けて研究していきたいです。』



ビーテングふい絹との「コラボショール」作成

瓜田副会長が蚕糸科学研究所において自らビーテングされた「ふい絹」1キロを提供して頂き、天蚕糸との交織を試みた。昨年はビーテングを施さない「ふい絹」での交織をしたためやや固めの触感のショールであったがビーテングしたことにより、一層柔らかな手触りが得られるようになった。今後はこの低価格の「ビーテングふい絹」と天蚕との交織ショールの販路拡大に大きな期待が寄せられる。



【 特別編集 】 天蚕布の本仕立着物と袋帯を召した天女の皆さん



八島恭子さん



引地梯子さん



柳沼信子さん



天蚕の会 設立 1 0 周年を盛大に祝う



10月25日午後、霊山こどもの村児童館において、設立10周年を祝った。大日本蚕糸会常務理事安藤俊幸氏、日本野蚕学会会長赤井弘氏を初め、県農林水産部園芸課長、県ハイテクプラザ福島技術支援センター所長他来賓12名を迎えて盛大に開催した。

菅野秀一会長は「本来ならば柳沼泰衛前会長が挨拶すべきところであったが誠に慚愧に絶えない。残された会員一同が柳沼氏の意志を受け継ぎ更なる発展に尽くしたい」と述べた。

安藤常務理事は「りょうぜん天蚕の会が制作したハンドバッグのクオリティの高さが評価されて純日本絹マークの認定に至った」と祝辞を述べられた。また、市長代理の三浦産業部長は「伊達市の新たな特産品になってきており伊達市の誇りである」との讃辞を贈られた。瓜田章二副会長が「福島・伊達を支えた蚕糸業の歴史」と題して記念講演を行った。式典終了後の会場で福島県から駆けつけてくれた山本真美さんのハーブコンサートがあり華やかな演奏を堪能した。又、祝賀会に先立ち、りょうぜん紅彩館ホールにおいて山本さんの夫倫博氏、石渡宏氏に加えて菅野公会員がフルート演奏を行って紅彩館一般利用者からも大きな喝采を浴びた。

瓜田副会長 養蚕振興セミナーで講演

2月5日(木) J A福島ビル大会議室において平成26年度養蚕振興セミナーが開催され瓜田副会長が「福島・伊達を支えた蚕糸業の歴史とりょうぜん天蚕の会事業活動」と題し基調講演をした。参加された大勢の養蚕農家は天蚕による会の活動に強く興味を示されていた。



ふい絹と天蚕糸(紬)のショール製作



瓜田副会長の勤務する大日本蚕糸会「蚕糸科学研究所」より提供された「ふい絹」=家蚕繭を一度に200～300本繰糸した太い糸に撚りを掛けずに纏めた糸=を経糸と緯糸にも用い、天蚕の紬糸を等間隔に用いて織りあげた。生糸の白色としなやかさに天蚕紬の萌葱色が加わり上品な気品を伺わせる作品となった。



八島事務局長が蚕糸科学研究所に持参し織の特色を説明するまでもなく、所長初め職員からも「綺麗で家蚕・天蚕双方の長所が際立つショール」と歓声が上がった。これにより、ふい絹砵打ち糸を更に提供していただけることとなった。(写真)

柳沼泰衛会長逝く

当会会長として設立から今日まで10年間の活動を導いてこられた柳沼泰衛さんが4月14日に逝去されました。県職員として蚕業試験場長、繭検定所長を務められ、養蚕の振興にささげた81歳の生涯でありました。

「天蚕は山の神の贈り物。大切に育てなければならない」「地域の誇りを取り戻そう」と天蚕に魅力を持ち、早くから研究されて萌葱色した繭の利活用と生産普及を目指し「りょうぜん天蚕の会」を結成し今日に至りました。この功績は誠に偉大であります。ご冥福をお祈りいたします。

福島民友新聞 4月30日(水)

追 想 ふくしま

蚕に寄り添い続けた人生

元県蚕業試験場長
りょうぜん天蚕の会 会長
柳沼 泰衛さん

4月14日
81歳(細菌性肺炎)

蚕に寄り添い続けた人生

蚕に寄り添い続けた人生

蚕に寄り添い続けた人生

蚕に寄り添い続けた人生

蚕に寄り添い続けた人生

蚕に寄り添い続けた人生

天蚕の山付作業を実施

4月29日9時から館ハウスにおいて会員21名が参加して山付作業を行った。作業前に14日に亡くなった柳沼会長に黙とうをささげ、遺志継承を誓い、若葉が萌えるエゾノキヌヤナギの枝に約20,000粒の卵を山付けした。

「天蚕の会」活動再開

伊達 飼育ハウスで種付け

伊達市のりょうぜん天蚕の会は29日、同市東町の天蚕飼育ハウスのネット掛けや天蚕の種付け作業を行った。今日亡くなった会長の柳沼泰衛さん(享年81)の遺志を引き継ぎ、活動を再開した。

市内外の会員約40人が参加。柳沼さんに黙とうをささげ、作業に入った。この日は約20棟のハウスのネット掛けと、天蚕の卵となるエゾノキヌヤナギに天蚕の種付けを行った。柳沼会長の喜野一さん(63)は「柳沼さんは会のシンボルであって指導者、研究者として立派な人だった」としのび、遺志を引き継いで活動をさせていきたい」と語った。

柳沼会長の遺志継ぎ風評一掃を「天蚕」活性化に決意新た

霊山の団体10年目の種付け作業

高田の柳沼泰衛(故人)は、天蚕の復活を夢見て、1993年(昭和68)年、伊達市(旧霊山町)生まれ。東京農工大卒。県蚕業試験場長、県繭検定所長を歴任。退職後に「りょうぜん天蚕の会」を設立、会長を務めた。元霊山町選挙管理委員長。

【会長あいさつ】

立春の候、皆様には益々ご健勝のことと存じます。平成17年2月に設立した「りょうぜん天蚕の会」はこの度10年目を迎えました。これも偏に会員皆様の熱心な活動と関係機関のご支援の賜と厚く御礼申し上げます。

さて、当会の活動趣旨は、霊山の豊かな自然環境を活かし、野蚕である「天蚕」の育成と、その飼育体験交流や独特の風合いをもつ萌葱色の繭・絹糸の新たな加工や商品化による地域特産品の創成をはかり、活力ある地域づくりを推進しようとするものです。

設立以来、これまで伊達市、伊達市観光物産協会、大日本蚕糸会、福島県関係機関等のご支援をいただきながら、会員一同一丸となって繭の生産、新商品開発に取り組むとともに、小学校等への観察用天蚕配布、県内外天蚕関係者との交流及び展示PR活動等を行っております。

25年度は、原発事故に関係した課題が取り巻く中で約8,800粒の天蚕繭を収穫、天蚕織物による装飾品を製作し「東京有楽町」「京都」「札幌」等で展示販売活動を行い、大日本蚕糸会の「純国産宝絹展」に出展し「伊勢丹新宿店」「高島屋横浜店」で展示され、好評を得るとともに本会の活動状況を全国に紹介することができました。

また、蚕糸・絹業提携システム事業の伊達天蚕推進研究会の活動では天蚕ハイブリット生糸を使用したショールや手工芸品等の生産及び展示等を図ることができました。

26年度は、本会設立10周年を期に、これまでの成果と実績を基にさらなる前進を図る所存でありますので皆様のご支援ご協力をお願い申し上げます。



柳沼泰衛会長↑



天蚕ショールとハンドバッグ

天蚕ショール市勢要覧表紙を飾る

～ 伊達市6年ぶり発行の市勢要覧 ～

伊達市は3日までに、市の概要や魅力などを紹介する市勢要覧を発行した。本編と資料編に分かれ、本編は市の施策や復興への取り組み、市の歴史、観光など。資料編は国勢調査、工業統計、経済センサスなどの統計を中心にまとめられている。



6年ぶりに発行した市勢要覧を手に説明する仁志田市長

市の概要、魅力紹介

この本編の表紙に我ら「りょうぜん天蚕の会」で製作した「天蚕ショール」が萌葱色鮮やかに掲載されており、多くの市民から問い合わせをいただいている。

裏表紙には天蚕繭の写真とともにショールが次のように紹介されている。

「伊達市は江戸中期から昭和初期にかけて養蚕によって栄えました。表紙の写真は日本古来の蚕「天蚕」の繭で作ったショールです。天蚕の繭は黄緑色をしており、独特の光沢感があります。」と。

(4月4日(木) 民友新聞参照)

女性講座「フラワーポット」開催

9月12日と10月18日、月舘中央公民館の女性講座「フラワーポット」が開催された。八島恭子会員が講師を務め20名が参加し、「天蚕」によるコサージュ製作が行われた。天蚕を初めて見る受講生も多く鮮やか繭に驚嘆していた。講座後半は受講生が4班に分かれ、それぞれ知恵と力を合わせての共同作業は、素晴らしい作品に仕上がりに好評であった。



大日本蚕糸会「純国産宝絹展」に出展

1月2～7日に伊勢丹新宿店、8～12日に高島屋横浜店で、大日本蚕糸会コーディネートによる「純国産宝展」が開催された。純国産絹を使用して、より良いものの作りに励む全国40数団体の蚕糸・絹業提携グループが作る製品が展示され、活動について紹介された。

我が「りょうぜん天蚕の会」からは、ショールとハンドバッグが展示され、名だたる製品の中にも注目を浴び、次のように紹介された。

「絹のダイヤモンド」と呼

ばれる天蚕糸。養蚕業で栄えた伊達市霊山町では天蚕研究と繭生産を行い、天蚕の利用拡大を目指しています。バッグやショールも製作」

りょうぜん天蚕の会
“絹のダイヤモンド”と呼ばれる天蚕糸。養蚕業で栄えた伊達市霊山町では天蚕研究と繭生産を行い、天蚕の利用拡大を目指しています。バッグやショールも制作。
問い合わせ/りょうぜん天蚕の会(柳沼泰幸)
住所/福島県伊達市霊山町中川字様本9
☎024-586-3004

exhibition

1 在来種の繭や特徴ある品種の繭を展示 2 特別に育てた「生きた蚕」も展示 3 組紐の出張実演を予定 4 大日本蚕糸会が定めた基準に従った、国産絹製品に付けられる「日本の絹」純国産マーク

純国産 宝絹takaragin展
●日時/平成26年1月8日(水)～12日(日)
10時～20時(12日は18時まで)
●場所/横浜タカシマヤ 8階階会場
●後援/農林水産省 経済産業省 財大日本蚕糸会 シルク博物館
●主催・問い合わせ/蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会
☎03-5642-6527

機織り・紬研修開催 ～ 伝統の技法、真剣に学ぶ ～

2月28日、八島工房(事務長宅)において会員8名が参加し機織り・紬研修が開催された。山根好子先生を講師に迎え、伝統ある機織り・紬の技法を真剣に学んだ。



初めて機織りをする会員もいたが、短時間にもかかわらず、手際よく要領よく織り上げるなど有意義な研修であった

皇后様「天蚕の山つけ」 「蚕に桑やり」

～ 皇室伝統の養蚕作業 ～

5月7日、皇居内の養蚕施設で「天蚕」の卵をクヌギの木に付ける「山つけ」の作業をされた。明治時代から皇后が受け継いできた伝統の養蚕作業である。

網で囲われた「野蚕室」で、それぞれ25粒の蚕の卵が付いた短冊状の和紙15枚を丁寧にクヌギの枝に巻き付けた。10日ほどで幼虫が生まれ、6月中旬から7月にかけて繭になる。

(5月8日 民友新聞参照)



6月26日、皇居内にある紅葉山御養蚕所で蚕に桑を与える「給桑」の作業をされた。

皇后様は「たくさんいただくんでしょね」「足りませんか」と話しながら、体長6センチメートルに育った日本純蚕種の蚕「小石丸」に桑の葉を与え、耳を近づけて桑を食べる音を聞いておられた。

(6月27日 民友新聞参照)



出来上がった絹糸や反物は、外国元首への贈り物の絹製品に使われる。

からむし会館・苧麻^(ちよま)交流館を訪ねて

～ 国の残すべき有形文化財に指定 ～

10月29日、会員11名参加して昭和村カラムシ交流館を訪ねた。今回の研修には伊達市森林公社の支援の下に行われた。昭和村のカラムシは「越後上布」「小地谷ちぢみ」の原料として国の残すべき有形文化財に指定されている物である。

しかし、近年の着物離れ、手間暇のかかる天然素材は非経済製品とされて敬遠されて衰退の一途にあった。昭和村では上布原料として出荷出来なかった原料材を用いた織の技法を今に伝えて来たことが評価され、国の支援を得るに至り、カラムシをベースとした交流館、織物会館、苧麻交流館(昭和村直売所)を一カ所に集合させた施設である。

今回の訪問は、カラムシ織物館の学芸員が「天然素材をベースにした展示」を企画し、その一環として「天蚕」を取り上げたことによるものである。素朴な原始的な織物であるが先人の知恵と技が凝縮された優れた織物に間違いなかった。天蚕商品の価格をどのようにするか議論のあった時、このカラムシ織の手間暇と貴重性・唯一性を参考にした経緯がある。

霊山町にもこの様な養蚕・天蚕をテーマにした施設が望まれるというのが参加した会員一同の感想であった。



からむし織りに見入る会員



からむし会館

綜^{そう}統^{とう}研修行われる

～ 経^{たていと}糸の重要性を改めて認識 ～

12月15日午後1時半より、奥山製作所において綜統研修会が行われた。講師に自然染め工房の山根好子氏を迎えて会員9名が参加した。予め、奥山・引地両会員が綜統に必要な台を手作りしてしてくれたので利便性が高まり作業効率が高まった。講師の模範実演に引き続いて、会員一人一人が体験して機織りにおける経糸の重要性を改めて認識した。



綜統を実演する山根講師と会員

日本絹マーク認定品展示会に参加

～ 銀座三越で純国産 宝絹 takaraginu 展 ～

1月14～15日、日本橋三越百貨店において「日本絹マーク認定品」の展示会が開催された。この展示会は、大日本蚕糸会が主催する宝絹の商品と近年日本絹マークの認定を受けた商品を紹介し、織物業界、和服流通業界に対してPRして販路拡大・販売促進へ連携を図る目的である。本会から柳沼会長と八島事務局長がプレゼンターを務め、来店した多くの業者の関心を集めた。その中で、本会の天蚕の飼育状況を視察したい意向も伝えられた。



天蚕製品展示会場での柳沼会長



展示、実演状況

天蚕布による「絡^{らくす}子」を披露

～ 霊山町下小国 龍徳寺住職 久間泰弘和尚 久間泰弘和尚 ～

12月2日、伊達市霊山町山戸田の曹洞宗成林寺（久間泰弘住職）において役員会が開催され、この席で霊山町下小国の龍徳寺住職(成林寺副住職)久間泰弘和尚が天蚕布の「絡子」を披露した。

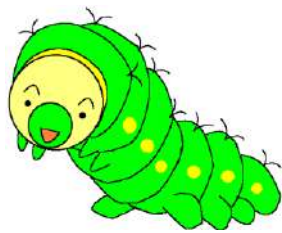


萌葱色の絡子は黒の法衣に鮮やかで出来映えに満足されていた。泰弘和尚は平成21～22年まで全国曹洞宗青年会長の要職にあり、22年には奈良東大寺において全日本仏教青年会千僧法要の導師を務めるなど多大な重責を務められた。

現在は、成林寺境内に設けられた「全国曹洞宗青年会災害復興支援本部」の現地本部長として、全国から来ている僧侶達の支援活動をリードするとともに、震災各地の避難所に出掛け、被災者への行茶や心のケアを行っている。

左 天蚕絡子着衣の久間泰弘住職

「りょうぜん天蚕の会」登録商標申請



～ 天蚕商品の信用維持と進展を目指して ～

8月23日付けで「りょうぜん天蚕の会」の登録商標申請を行った。商標とは、他人の商品・役務（サービス）と区分するために、業として自己の取り扱う商品・役務について使用するマーク（標識）を言う。

日本の商標法上、商標は「文字、図形、記号、立体的形状若しくはこれらの結合又はこれらと色彩との結合」に限られる。

「りょうぜん天蚕の会」 商標権は事業者が円滑な経済活動を行っていくためには、取引者・需要者がある商品や役務は誰が製造又は提供したものか、その商品や役務の質としてはどのくらいのものが期待されるのか、といった事項がわかることが必要である。指定商品についての登録商標を独占的に使用する権利（使用権）であるとともに、他人が指定商品と類似する商品について、当該商標又は類似する商標を使用することを排除することができる権利である。申請した商標は年度内に登録される見込みとなり、本会商品の信用維持と当会進展の大きな財産となる。

天蚕の会活動推進に助成金交付さる

～ 蚕糸・絹業提携システム確率対策事業に着手 ～

平成23年4月1日、財団法人大日本蚕糸会会頭高木賢氏より、当事業の実施計画の承認及び助成金の交付決定があった。当事業は蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業実施要項（農林水産事務次官依命通知）に基づくもので、提携システムの名称を「伊達天蚕推進研究会」と言い本会がシステムの中心的組織となる。

天蚕農家(6戸)及び養蚕農家(2戸)が生産した繭を天蚕の会が簡易専用繰糸機で繰糸した混合糸(ハイブリット糸)または天蚕糸を経糸とし、一粒紬の手紬糸を緯糸として、手織機による天蚕紬織りショール等の製品に仕上げ、関係機関と連携して直販を中心とし販売するもので、収益の安定と事業拡大を目指す。事業は25年度までの3年間。

また、「伊達市地域づくり支援事業」も採択になり、生産安定化対策、後継者対策、販路拡大、新製品開発等に関して市当局の力強い支援が継続された。

巨大地震発生！ M9.0 東日本大震災

～ 大津波で浜集落壊滅、福島第一原発爆発 放射性物質拡散 ～

3月11日(金)午後2時46分ごろ、三陸沖を震源とするマグニチュード(M)9.0の巨大地震が発生、宮城県北部で震度7、本県で震度6強を観測した。気象庁によると、関東大震災などを上回り、近代的な地震観測が始まって以降最大である。

地震直後に発生した大津波により、相馬、南相馬両市を中心に浜通りの海に近い地域が広い範囲で水没し、東京電力福島第一原発の1号機と3号機が爆発し、同原発から半径20キロ以内の住民が避難した。未曾有の大災害となった。被災された方々に心からお見舞い申し上げます。



地震、津波、原発事故を報じた新聞記事 (左から 15、14、13、12 日の民報紙)

広島可部天蚕生産グループから震災見舞い届く

～ 天蚕で結ばれた広島県の仲間から ～

昨年度の世界野蚕学会において「リング」に繭を丸ごと入れたキーホルダーが目に入った。ユニークであり商品にするため福島でリングを探したが見つけれず、可部天蚕生産グループに照会したところ中国で製造したものであるとの返事とともに日本での部品生産会社も見つけて頂いた。さらに「震災・原発事故風評被害の見舞いにお使いください」と100個も送付して頂いた。天蚕で結ばれた仲間とは有り難いものである。この繭リングストラップは直ちに制作し10月2日の阿武急保原駅でのイベントに展示したところ30分で完売となった。また、東京八重洲口の福島県観光交流館でも手頃な価格と大好評であった。



家蚕

天蚕 コスデカ

天蚕繭を丸ごと入れた「リングストラップ」

会長夫妻天蚕ジャケットで金婚式に臨む

～ 鮮やかな萌葱色の洋装に賞賛の声 ～

9月14日、霊山中央公民館において霊山町老人クラブ連合会主催による金婚夫婦表彰式が行われ、当会の柳沼会長夫妻が表彰された。

席上夫人の信子さんは天蚕布で仕立てたジャケットを召して臨まれ、ひときは鮮やかな萌葱色の洋装に参列者の注目を浴びた。



「ジャケットは横縞模様合の仕立に工夫を凝らし天蚕独特の輝きがとても上品に仕上がりました。

スカートは上衣に合わせ若草色の着物を利用して仕立替を行ったもので、思いのほか上下ピッタリに仕上がりました。」(夫人談)

天蚕の会創立以来7年にして衣類製作の確信を得た。



金婚夫婦表彰式での柳沼会長夫妻

(柳沼会長のネクタイピンも天蚕仕様です)

～ 市内3校(掛田小、大石小、小国小)で総合学習 ～



大石小「蚕を育てよう」(八島・柳沼信子さん)



「まゆ玉工芸」での八島さん



生徒の作品「ペンギン」

「純国産絹マーク」の使用許可される

天蚕では全国初！ 日本絹業協会から大きな期待！

日本絹業協会に申請していた「純国産絹マーク」の使用が4月14日付けで許可された。これは4月6日に柳沼会長自ら協会（東京都有楽町）に出向き、天蚕ハイブリッドショール等の天蚕製品を持参してプレゼンテーションを行った結果である。

天蚕糸による申請と許可は日本最初のことで、全国から注目を浴びている。日本絹業協会も全国で天蚕を飼育している団体又は個人名を特定していたが、申請は初めてのことであり今後の当会の商品化・生産量のアップに大いに期待を寄せていることがうかがえる。

また、当協会では新商品開発等の支援として研修費や開発費の助成についても検討しているとのことで、これらにより新しい売れる特産品が創成されれば、地域活性化がより一層促進されると思われる。

「純国産絹マーク」の使用許可の報は、早速、福島県農林水産部園芸課にも情報が入り、県蚕繭の再評価につながることで話題となった。

5月27日、柳沼会長と八島恭子さんが県庁を訪問し、鈴木義仁農林水産部長に絹マークの使用承認を報告した。鈴木部長は「全国に本物の良さを伝えてほしい。」と語るとともに、県ブランド認証製品の認定などを視野に販路開拓などを支援する意向を示した。



上：鈴木農林水産部長に絹マークの使用承認を報告した新聞記事。

左：純国産絹マークと承認時の製品

左上：純国産絹マーク（登録番号 114-02）

秋篠宮妃紀子さま 「天蚕」を詠む

～「葉」を題に「歌会初の儀」～

1月14日、皇居・宮殿「松の間」で新春恒例の「歌会初の儀」が開かれ、両陛下、皇太子ご夫妻、秋篠宮ご夫妻ら皇族をはじめ、一般の入選者らの歌が伝統的な節回しで披露された。この席で秋篠宮妃紀子さまは「天蚕の繭をつむぐ」情景を次のとおり歌われました。

天蚕 (やままゆ) は まてばしひの葉につつまれて うすき緑の繭をつむげり

以前から皇居では蚕の飼育が行われており、特に美智子皇后も天蚕に精通されており、これまでも数度新聞等で紹介されています。紀子さまにおかれても「萌葱色の天蚕」には特別な思いがあったのでしょうか。

友 2011年(平成23年)1月15日(土曜日) 9版 社会 (26)

「葉」を題に歌会始

伝統的な節回しで披露

陛下、白樺を詠む



新春恒例の「歌会初の儀」が14日、皇居・宮殿「松の間」で開かれ、「葉」を題に天皇、皇后両陛下や皇族、一般の入選者らの歌が伝統的な節回しで披露された。天皇陛下は、結婚50年を迎えた2009年の立春に種をまいたシラカバの若葉に、夏の

日差しが当たっている情景を「五十年の祝ひの年に共に時きし白樺の葉に習き日の時」と詠まれた。

皇后さまは、皇居内で散策中に目にしたまんさくの水を題材に「おほかたの枯葉は枝に残りつつ今日まはさくの花ひとつ咲く」と詠んだ。

皇太子さまは登山中に目にした紅葉を、皇太子妃雅子さまは長女愛子さまが通う学習院初等科のイチヨウを歌にした。

両陛下、皇太子さま、秋篠宮ご夫妻ら皇族をはじめ、一般応募の約2万首から選ばれた鳥取市の農業森本由子さん(76)ら入選者10人が参列。雅子さまは儀式には欠席した。

最年少入選者で兵庫県伊丹市の中学3年大西春花さん(14)らに続き、選考代表、陛下に招かれて歌を詠んだ召人の歌人安永蔵子さん、常陸宮さま、雅子さま、皇太子さま、皇后さま、天皇陛下の歌が順に朗詠された。

儀式終了後、入選者が宮内庁で記者会見。京都市の文筆家桑原亮子さん(30)は

天皇、皇后両陛下が参列して行われた「歌会初の儀」＝14日午前、宮殿・松の間(代表撮影)

国際野蚕学会に出席 ～天蚕の魅力 世界にPR～

12月23～24日、東京農業大学(東京都)で第6回国際野蚕学会が開催され、柳沼会長と八島事務局長が参加した。当会議はアジアや欧米など約20カ国の団体が出席し、プレゼンテーション形式で野蚕に関する活動や新商品を発表した。本会は「天蚕ハイブリット糸ショール」や通常の3倍の量の繭を回収できる飼育方法、天蚕の展望など、日本固有の天蚕魅力を世界に伝えた。



天蚕による地産地消に取り組み、産出量の約10%を天蚕の糸(柳沼会長)は、21日から23日まで東京の東京農業大学で開催される、第6回国際野蚕学会(以下「国際野蚕学会」)に出席し、天蚕の魅力と活動を紹介する。16日は同市で同学会の開幕式が行われる。

天蚕の魅力 世界にPR

伊藤 21日から国際会議出席

会議に向け、打ち合わせを行い、発表内容を固めた。野蚕は野生(生息するカイコで、絹織物の素材となる。天蚕は自然に繁殖した日本原産の大型野蚕の一種)で、時々は地産地消(産地)で、世界に天蚕の魅力をPRする活動を行っている。16日は同市で同学会の開幕式が行われる。

天蚕やシルクの糸、ハチマキ、リボン、ストールなどに天蚕の糸が使用されている。

天蚕はアジアや欧米など約20カ国の団体が出席し、プレゼンテーション形式で野蚕に関する活動や新商品を発表する。当会は「天蚕ハイブリット糸ショール」や、通常の3倍の繭の量を回収できる飼育方法、天蚕の展望などを23日に発表する。国際野蚕学会は「日本固有の天蚕の魅力を世界に伝える」との趣旨で開催している。

NHKテレビ「ふるさと一番」全国生放送

大反響！ 全国から「天蚕」の問い合わせ殺到！

6月25日、12時20分から45分までNHK昼の番組「ふるさと一番」で「りょうぜん天蚕の会」の活動が、女優酒井美紀さんをゲストにNHK福島の小林陽広アナウンサーの軽快な司会により全国に紹介されました。

数日前からの準備とともに当日は朝7時から天蚕会員21名、地元の協力25名、NHKスタッフ約40名が協力し、慌ただしくも万全の体制を整え本番を迎えました。

放送開始！ 酒井さんが襟に巻いた鮮やかな萌葱色の天蚕布の紹介を初めに、会長夫妻により飼育ハウスの天蚕と繭、集落センター内での糸繰り作業、天蚕布の機織り作業が案内されました。そして最後はグランドに出て、松本幸治会員の「霊山太鼓」、菅野公会員の「フルート」、大友靖子会員の「熱唱」により、スポーツ民謡会員とともに全員で「天蚕音頭」を踊りました。またたく間の25分間でしたが見事な進行で無事放送を終了しました。

放送終了と同時に全国からの問い合わせが殺到し、天蚕への関心の大きさに驚かされました。私たち会員にとってこの上ない記念すべき日となりました。



↑ 酒井美紀さん



中川集落センター広場で「天蚕音頭」 ↑

県特産品コンクール受賞産品フェアに展示

～奨励賞受賞の「天蚕ハイブリッドショール」～

2月4～7日まで、福島市のコラッセ1階で去る11月18日の第9回ふくしま特産品コンクールで受賞した商品の展示フェアが開催されました。

何れも甲乙つけがたい優良な品ばかりですが、我が「天蚕ハイブリッドショール」はひときわ注目され質問が相次ぎ、連日柳沼会長、八島事務長はじめ会員相互に2～3人でその説明にあたりました。展示後半日には大雪にもかかわらず大勢のお客様が来場し、特産品受賞品への関心の高さを知ることができました。



平成21 年度県特産品コンクールで奨励賞受賞

～ハイブリッド主体のショールに注目～

11月18日、第9回福島県特産品コンクールが福島市「グリーンパレス」で開催された。天蚕の会ではショール二種を工芸部門に出品したが、その内の「天蚕ハイブリッドショール」が奨励賞を受賞した。昨年は「ハンドバッグ」、一昨年は「アクセサリ」を出品してきたが三年目の正直での受賞となった。今年も審査員がプレゼンテーションの折「何で天蚕なの？」と聞くなど、審査員事態の認識度の低さが県農林園芸課長にも諦めムードが漂っていた。

プレゼンテーションには会長の他、柳沼信子さんと八島恭子さんの三人が説明に努めた。信子さんが着用していた細身のショール（経糸は絹の草木染め、縦糸が天蚕の紬）も注目度が高かったとか。

今後三年間、福島県物産振興会の開催する展示会等でPRされることになりますから注文が増えることが期待されます。注文に応じられる生産体制の強化が望まれます。



ふるさと福島大交流フェアに展示即売

～県知事も出席、関東地区県人会に好評～

12月20日(日)、東京池袋の「サンシャイン・シティ」ワールドインポートマートビル4階展示ホールにおいて「ふるさと福島大交流フェア」が県観光交流課主催で開催され「りょうぜん天蚕の会」にも展示即売の要請があり参加した。

このフェアは県知事も出席して関東地区に在住する県人並びに友の会会員に案内する企画である。天蚕の会はちょうど県特産品コンクールで奨励賞を受賞していたので参加要請となったものである。

急な要請ではあったが八島事務局長夫人の恭子会員は東京が故郷であり、自家用車で上京し売り子に加わってくれた。あらかじめ二人の東京在住の知人に通知していたお陰でにぎわい、けっこうな売り上げがあった。

また、柳沼会長の東京在住のお兄さんご夫妻も来展され天蚕への思い入れに話の華が咲いた。来場者は約600名。



全国生涯学習フェスティバルに出品

～天蚕紬織物賞賛を浴びる～

10月11日～15日まで、郡山市ビッグパレットで「全国生涯学習フェスティバル」が開催され、伊達市ブースに当会の作品を展示しました。フェスティバル初日には秋篠宮夫妻が天蚕紬織物に大変興味を示され、当会のパンフレットを所望された程注目の展示でした。

期間中、柳沼会長はじめ連日会員が出展品の説明を行い、天蚕の幼虫を初めて目にし、萌葱色の美しい幼虫に感嘆の声が多く聞かれました。

展示説明に当たった会員は、会長の他、菅野秀一、阿久津チヨ、安田恭子、柳沼信子、大友靖子、生沼俊夫、河田明芳、八島利幸、八島恭子の延べ10人でした。



連日、大勢の観客で賑わう



伊達市ブース

「全国シルクサミット2008伊ふくしま」に出品

～会長の発表と天蚕製品の展示～

10月23～24日、農業生物資源研究所と福島県の共同主催による「全国シルクサミット」が郡山市日和田の福島県農業総合センターで開催されました。今回、アクセサリー、ショール、紬織ハンドバック三種、天蚕石鹸の他、天蚕の5令幼虫を展示すると共に、柳沼会長がこれまでの活動事例をユーモアを交えて発表しました。



サミットには昨年「霊山こどもの村」で開かれた全国天蚕セミナーの基調講演をされた赤井弘先生はじめ穂高天蚕センター職員、白鷹町天蚕生産者、ファランドール、秩父農業センターの近氏等旧知の方々も参加されていた。初日夕刻、会場を郡山市内ホテルにて懇親会が開かれ、会長夫妻、斎藤行応、八島夫妻、八島時男、大友靖子、高野金助、堀江の9名が参加。発表・展示参加は菅野公、河田明芳、安田恭子の3氏で、合計12名でした。

赤井先生には、21年10月末に長野県須坂市で開催するシルクサミット

に、これ等展示した製品を紹介するよう強い要望がありました。また、この大会はシルクの新たな用途開発に明るい展望を示す内容のサミットでした。

「第8回ふくしま特産品コンクール」に出品

“自然の風合と貴重性が優れ、素材性が極めて高い”と高い評価を得る。

11月20日、福島グリーンパレスにおいて県観光物産交流協会主催による「第8回ふくしま特産品コンクール」が開催されました。当会では、ハンドバック3種を出品、会長自ら商品説明にあたりました。NHKテレビ等で紹介されるなど好評を得るも入選には一歩及ばなかったものの、下記に示すように審査員の眼にも素材性の高品位は認められると共に貴重性は高く評価されたので、今後デザイン性について県特産品アドバイザーの指導が必要と考える評価でした。

審査員評は、

1. 特産品としての素材性は極めて高い。
2. もえぎ色の自然の風合と貴重性が優れている。
3. 商品として販売実績を積むこと。
4. バッグの手汚れ対策に留意し発水性を検討すること。
5. 織布の風合、感触は好評である。
6. デザイン、型等中高年向きと思われるが若者感覚ではキンチャク性のデザイン等手軽利便性を考えてみる。

特産品コンクールでは、出品前の販売実績を記入することになっているので、①市場性が低いと見られたこと、②和洋両用という型に理解が及ばないこと、③天蚕生糸は他の繊維に比べ発水性に秀れているとの特性への認知度が低い、なども審査に影響したと思われます。



町内4小学校に天蚕観察用幼虫寄贈

天蚕と飼育家蚕を素材にしたコサージュを胸に卒業式に望む……【大石小】

掛田、下小国、泉原、大石の各小学校に対し19年度に天蚕飼育観察ハウスを増設寄贈していますが、20年度も各校ともに3年生の総合学習として、5月上旬から中旬にかけて幼虫を持参し飼育観察を実施しました。大石小学校は柳沼会長と伊達普及所職員による養蚕に関する基礎知識の習得や天蚕の特性、あるいは飼育法について支援し、その他の小学校は八島事務長が講演、指導助言を行ないました。「掛田折り返し糸」や「養蚕茶話記」、更に日本最初の民間の養蚕伝習所が開設された歴史と伝統の町に話が及ぶと生徒達は目を輝かせ熱心に聞き入りました。



また、大石小では恒例の天蚕と飼育家蚕まゆを素材としたコサージュづくりが行われ、それぞれ作ったコサージュを胸に卒業式に臨むことになっています。

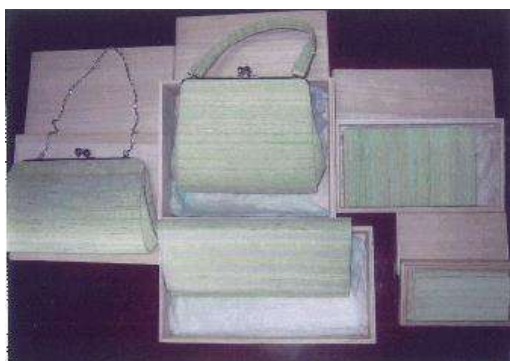
柳沼会長サポート事業の成果発表

柳泰節に会場笑いと感動！ 天蚕布に驚嘆！

平成19年度、県地域づくり総合支援事業の補助を受けていた団体による成果発表会は、1月12日、福島市のウェディングエルティで行われた。今年度補助を受けた中から4団体の真面目な発表の中で、柳会長は菅野公氏の投影したDVDでユーモアを交えて説明し、聴衆の笑いと感動を誘った。

会場入口には12月末に完成した天蚕布のショールや、天蚕織布で製作したハンドバック、懐紙入れ等、輝くばかりの製品に「素晴らしい萌葱色だ」、「繊維のダイヤモンドは初めて」という感嘆の声が挙がっていた。

成果発表会后、同会場で新年会を開催した。会員14名が参加し、更なる成果に向けて努力しようという思いが一杯であった。最後は、恒例の天蚕音頭で締めくくった。



全国初の「天蚕交流セミナー」開催

全国の飼育者、布織者、学識者等、霊山に集う

8月31日と翌9月1にわたり、全国初の「全国天蚕交流セミナー」が「霊山こどもの村」と「中川集落センター」で開催された。全国から天蚕飼育者や天蚕布織者、野蚕に関心のある方120名参加した。南は愛媛県城川町、長野県穂高町、埼玉県秩父市、神奈川・東京・千葉・群馬県の関東地区、北は岩手県一戸町と山形県白鷹町の生産者等であった。31日は朝から大雨となり、屋外で予定していた「霊山太鼓」と「竹生島流棒術」の披露は館内に変更となった。珍しい郷土伝統芸能にやんやの拍手がわいた。

開会式には会長の挨拶の後、県北振興局長吉川氏の歓迎の挨拶、仁志田伊達市長が、かつて霊山町は全国最初の民間の養蚕伝習所開設の町であったことや、「掛田折り返し糸」が世界に輸出された養蚕の先駆的町であったことを紹介した。



セミナーに入り、日本野蚕学会会長赤井弘氏は基調講演「天蚕の魅力と活用について」と題して、マイクを指し棒として熱演した。続いて、秩父の農業試験場の今氏は飼育指導者の立場、白鷹町の小松氏が織物業者の立場として、わが会の柳沼会長は、エゾノキヌヤナギという飼育樹木とこれまでの生産状況、並びに会の様々な活動として親子観察会、小学校の飼育体験鉢寄贈、グリーンツーリズム等の事例を発表した。パネルディスカッションに入り、貴重織物ではあるが、販売価格と販路の問題が参加者一同の課題であった。

白鷹町で撚糸研修と交流会を行う

12月13(木)、14(金)の両日、山形県白鷹町への撚糸研修を実施した。それに先立って、天蚕の会で数回実施してきたハイブリット糸を県ハイテクプラザで、繰糸を1メートル200回転の三本撚りとした。この糸は縦糸に使用できる見通しが出来たが、紡いだ糸を横糸にするためには手動撚糸する必要があるとの研修であった。天蚕布を織っている白鷹町の小松紀夫氏に研修依頼したところ、長井市の撚糸工場に伺うこととなった。また、立地条件が我が町と同様なので、中での飼育状況やセミナー参加した白鷹町のメンバーとの交流も待たれていた。

朝から小雪降る中、初日は、白鷹町の古刹「瑞龍院」、「深山観音堂」や「薬師堂の古代桜の古木」を見学した。夜は、白鷹天蚕の会員の他、町地域振興課の職員5名と副町長の参加を得て大いに交流を深めた。特に、川辺さんの繭にまつわる「昔ばなし」、天蚕音頭を白鷹町風にアレンジして踊りの披露には拍手が鳴りやまなかった。終わりには全員一緒にの踊りと盛り上がり、7時間に及ぶ交流となった。



天蚕繭工芸品の展示会体験教室を実施

11月18日～12月2日まで、福島市パセオ通り「岡崎陶器店」ミニ・ギャラリーにおいて当会会員が製作した天蚕繭を利用したブローチ、ネックレス、イヤリング、コサージュ等50点を展示した。



また、来場者に天蚕繭のコサージュ作りの体験教室を実施した。独特の色合いを活かしたぬくもりのある工芸品に「心を和ませる」の評が多く聞かれた。次回には是非天蚕布の展示をして欲しいとの要望もあった。

「天蚕布」ついに完成！

天蚕の会結成以来、念願であった織物がついに現実のものとなりました。

1月12日に開催された「地域づくりサポート事業活動発表会」(福島市エルティ)で柳沼会長の成果報告とともに初めて公開。参集者の驚感をいただきました。会員全員3年間の努力の結晶です。おおいに喜びを恭受しましょう。

福島民友 全県版の記事 →
平成20年1月12日(土)



会設立後の活動を振り返って

会長 柳沼泰衛

昨年2月設立後の1年はあっという間に過ぎ2年目の半ばにきていますが、会員皆様のご支援により、繭生産量3,000粒以上を達成し、2年目は前年を上回る生産ができそうな見通しです。

また地域活性化につながる天蚕飼育を通した親子体験教室、グリーンツーリズム交流会、あるいは天蚕繭繰糸機による初めての糸繰りを会員相互の研究も兼ね実施した結果、素晴らしい風合いの天蚕糸が紡がれたことなど、その活動は順調であったと考えています。

さらに課題であった天蚕繭工芸品の商品化による特産品の創出についても、様々な試作研究の結果、アクセサリ製品で高い評価を受け、販売も可能となり、天蚕繭の付加価値向上に大きな貢献が出来るようであります。

今後は県の地域総合サポート事業などの補助支援を受けながら、地域興しのために新しい活動に取り組む考えています。皆様方の絶大なお協力をよろしくお願いします。



霊山町内各小学校へ天蚕飼育教材の提供

昨年度から町内掛田・小国・泉原・大石の各小学校に天蚕2匹程度をつけた飼育樹であるエゾノキヌヤナギの植木鉢を2〜4鉢を寄贈し、総合学習や理科学習の時間に、柳沼会長や八島事務局長が講師となって天蚕の観察と飼育について特別授業を開いてきました。

この授業では、天蚕の習性やどのように飼育しているかなど、会長の天真爛漫な語りに教室は盛り上がり、子供たちにとって天蚕への興味が大変湧いたようでした。



また、霊山町の養蚕の歴史にも触れ、横浜から輸出されていた「掛田折り返し糸」が世界ブランド名であったこと、日本最初の民間教育機関「養蚕伝習所」開設の町であったことや日本最古の養蚕教育書「養蚕茶話記」を著した佐藤友信は霊山町出身者であることなど、自分たちの祖先のすばらしさと誇りを感じ勉学に励むよう、私たちの気持ちを子供たちに伝えることができました。

子供たちからの感想文は今回号に記載されてますのでご覧ください。(柳沼、八島)

天蚕繭工芸体験教室開催される

昨年11月20日と27日の2回、八島事務長宅で奥様の恭子さんが講師となって、県内各地から会員のほか約40名が参加し、天蚕繭の工芸品加工教室が開催されました。参加者の中には、8月の夏休み観察会に参加した親子の参加も多くあり、ペンダント・ブローチ・ネクタイピンなどの製作を楽しんでいた



できました。天蚕繭は何重もの層になっており、平らな金型に合わせるため、加工しやすいように萌葱色が映える表層と白色の内層に割り、表層を包むように貼り付ける技術には参加者誰もが悪戦苦闘していましたが、それぞれ個性的な天蚕繭の独特の柔らかい薄緑色とぼかし表情のある作品ができ、この企画は好評でした。参加した会員からは継続して工芸講座を開設して欲しい声があり、八島ご夫妻は大いに張り切っています。

第 2・3 (合併) 号 (平成 18 年 10 月発行)

地域づくり・けんぼくネット交流大会で会長に大喝采

第 10 回標記大会が去る 1 月 14 日、年度内県北地方・地域づくりサポート事業に取り組んだ実践団体や関係機関及び一般参加者が会して、二本松市安達文化ホールに約 200 名が参加し開催されました。

基調講演では、当会員の大友靖子さんが「自分自身も楽しもう！まちおこし」の題で講演し、自ら主催してきた霊山農テク学校の実践活動や当会の活動にも触れた内容で、スライド映写した旦那さんのバックアップも光った素晴らしい発表でした。

続く実践事例発表では、数ある実践団体の中から当「りょうぜん天蚕の会」が選ばれ、柳沼会長はスライド映像もお構いなしに、ユーモアたっぷりに「天蚕飼育体験と天蚕繭の利活用を図る事業」という題で 1 年間の活動を熱く語り、会場を大いに湧かせました。発表が終わると、会場からは喝采とともに

「会長は人間国宝級のゴールデンタン（舌）だ」との声があがるほどで、霊山町の評判が大変高まった感がありました。（八島・公）



初めての糸取りに挑戦

1 月 28 日、霊山町の中川集落センターで柳沼会長をはじめ 30 人の会員が集い、天蚕の繭から糸を紡ぐ「糸取り研修」を初めて実施しました。

農業研究センターの瓜田章二氏（本会員）の指導を受けながら、私たちが丹精込めて生産した天蚕繭を約 90 度の湯で煮込み、繊維をほぐしたあと、特注で購入した糸繰り機にセットしました。緊張の中、機械のスイッチを入れると糸車が滑らかに回転し、十数個分の糸を次々と巻き取っていきました。

「うわー！きれいだねー！」私たちは天蚕特有の「もえぎ色の極上糸」を見つめて感嘆の声を上げました。傍らには昔活躍した木製手動の糸繰り機 2 台も据えられ、「昔取った杵柄」の婦人たちにより負けず劣らずの見事な糸取り競演が行われました。

研修は半日程度でしたが、私たちはかつての蚕糸王国霊山と先人の知恵と努力に思いを馳せながら、天蚕の会発足 2 年目にして「繊維の女王」を紡ぐことができました。（修）

（この「糸取り研修」は、平成 18 年 1 月 30 日の福島民報で大きく報じられました。）



今年为天蚕卵の山付けに思う

副会長 斎藤行応

今年为天蚕卵の山付け開始は 4 月下旬に始まり、2 回目は 6 月上旬、3 回目は 8 月上旬と 3 回行うことができました。

これまでの天蚕飼育について考えられること、一つは 1 回目の収穫は予定通りでしたが、2 回目は山付けした卵数の割には思うような繭の収量が確保できず、予想したほど良くなかったようでした。この原因には、孵化率が悪かったものか、それともカエルや蜘蛛、またはネズミ等の被害にあったのか等、さまざまな原因があるようです。



ろです。

そのほか、いろいろな課題も沢山ありますが、会員皆様方のご協力をいただきながら一つ一つ解決していきたいと思っております。

なお、私事ですぐ、今年 1 月と 6 月に体調を崩し、入退院を繰り返しましたので、総会にも出席できず、また天蚕飼育にとって大事な時期に休んでしまい、会の皆様にはご心配等をお掛けしましたこと、本当に申し訳なく存じております。



町長あいさつ「古雅の里・霊山にふさわしい会の発足」

霊山町長 大橋芳啓

霊山町を語るとき、古（いにしえ）の文化にはじまります。
東北山岳仏教の拠点、南奥文化の中心として隆盛をきわめたこと。
北畠顕家が陸奥の国府を多賀城から霊山に移したこと、そして、蚕の町であったこと。

信達地方の生糸が、登世糸（のぼせいと）として京都に出荷、西陣の原料となるや、品質、量ともにめざましい進歩を遂げました。明治 12 年には、「第 2 回全国蚕糸業振興会」が「掛田」で開かれています。掛田の名は一躍有名になり、「掛田折返糸」はどんどん輸出に向けられ、一大蚕糸王国を築きあげた歴史を残す町です。

霊山の里が、霊山の自然が、ひたすら待ちこがれていた「天蚕の会」の創設です。
会員皆さんの創意に敬意を表しますとともに、限らない進展をご期待申し上げます。



会長あいさつ

去る 2 月 5 日に開催された設立総会において、はからずも会長に選任されました。約 40 名の賛同者の皆さんと力をあわせ、微力ですが有意義で楽しい会となるよう頑張っていく所存です。

この会の活動趣旨は、りょうぜんの豊かな自然環境を活かし、野蚕である「天蚕」の育成と、その飼育体験交流や独特の風合いをもつ萌葱色の繭・絹糸の新たな加工や商品化による地域特産品の創成を図り、活力ある地域づくりを推進しようとするものです。

一方、霊山町はかつて蚕糸王国として栄えた歴史的背景があり、その文化財の保護や伝統技術の継承に役立つ活動についても推進する予定です。これら事業の実施は大変な面もありますが、原点は自然保全と優良天蚕繭の安定生産にあります。

さらに、この会が夢とロマンを語り合う地域人材交流の場になればと思っておりますので、皆様方のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

なお、この事業活動が、この度、県の地域づくりサポート事業の認定を受け、今後 3 カ年間の支援をいただくことになりました。

霊山町をはじめ、関係各機関に対し深く感謝申し上げご挨拶といたします。(会長：柳沼泰衛)

りょうぜん天蚕の会設立総会
17.2.5



第 1 号（創刊号）（平成17年6月5日発行）

りょうぜん天蚕の会だより創刊号

平成17年度地域づくりサポート事業補助金90万円交付決定

この度、りょうぜん天蚕の会事業に対し、県北地方振興局の地域づくりサポート事業の補助が採択となりました。今後の安定的な事業推進体制ができましたが、設立総会時点では、サポート事業についてはお伝え出来ませんでしたので、ここにご報告いたします。

さて、事前には、1月末県北地方振興局主催による「けんぼくネット交流会」が開催され、事務局長（八島）が出席し、およその説明を受けていました。

総会后、事務局長は直ちに地方振興局に向向き、申請書について担当者と協議し、それを踏まえて庶務の菅野氏と9日の深夜までかかり計画書を書き上げ、翌2月10日の締め切り日、柳沼会長と事務局長と地方振興局に提出することができました。

限られた時間の中での申請となりましたが、幸いにもこの計画が採択となりました。

今回の計画申請は、地域づくりサポート事業趣旨に沿っていたとのことで優先的に採択され、3月18日には内示を受け、さらに4月1日付けで補助金交付申請書を提出することができました。4月12日には県より発表があり、県北地方振興局からは36件が選ばれ、当会は90万円の補助金交付が正式に決定されました。

今年の事業については、6月上旬の観察会を始め、小学校への天蚕飼育の教材提供、夏休みの親子勉強会、9月には先進地視察、10月下旬には天蚕繭の加工研修会など様々な事業を展開する予定です。

今後、3カ年間継続する補助金となりそうですので、当事業を成功裏に運営出来るよう努力して参る所存です。ぜひとも、会員皆様方の絶大なるご協力をよろしくお願い申し上げます。（八島事務局長）

【天蚕飼育の様子から】



5月2日 ネットハウス内の飼料樹と山づけ



5月2日 天蚕の卵（山づけネット）



5月2日 ふ化して間もない幼虫



5月27日 横網縞に育った天蚕（4齢）

20周年記念に寄せて 石塚 裕美

神宿る霊山の麓、この自然の恵みの中で「りょうぜん天蚕の会」が根を下ろし20年が経過したと伺います。その記念誌の発行を心からお慶び申し上げます。

私が会と関わり始めたのは10年余り前から。会の皆様には、天蚕について無知な私にその飼育法から製品作りまで親切丁寧に教えて下さりとても感謝しております。お陰様で少量ながら自宅で飼育に挑戦できるようになりました。

ただ、去年はクヌギがカミキリムシにやられ、今年は冷凍しておいた去年の卵を山付けしても孵化せず、2年続きの大失敗。もう少し成果が出せるよう切磋琢磨して行きたいと思っております。

天蚕がクヌギの葉を食べる姿は何とも愛らしく、その繭から紡ぎ出される光沢のある黄緑の糸はとも美しく魅了されます。

温暖化の影響で天蚕飼育も難しくなる中、会の皆様がクヌギ畑で一生懸命汗を流し飼育する姿は会の宝そのもの。

今後も知識と経験を積み重ね未来輝く会へと発展成らんことを願ってお祝いの言葉と致します。

織姫を目指して 大友 靖子

私の母方の祖父は昭和のはじめ、蚕物士をしていました。家の中には売買する繭がいっぱいで、農家から繭を買い入れてくる人、川俣までも運搬する人、桑畑もあったので養蚕をする農家の人と多くの人が出入りしていたそうです。

祖母の実家は大きな養蚕農家で2階に続く階段が3、4つあり、たくさんの蚕を飼っていました。最盛期には大人数で1日に何度も桑をかけたり、繭を収穫。いくつもある階段を上り下りしたのでしょう。想像しただけでも目が回りそうです。

祖母が娘時代は機織り「嫁入りする時は、くず繭で糸を紡ぎ、帯を織ったんだ」と、野ブドウ色の帯を大事そうに撫で、「これは弛まなくて良い帯なんだア…」と言っていたのを覚えています。

そして、孫の私は織姫を目指して天蚕の会に入会したのですが、年数だけは20年。憧れの織姫になるにはまだまだこれからが修行です。

緑色の繭に心惹かれた会員の皆さんとの輪が大きく広がり、これからも益々一緒に楽しく活動できますように。20周年おめでとうございます。

絹の魅力再発見に向けて 瓜田 章二

蚕糸の歴史において、現在のその情勢からは、その伝統文化を伺う事はできない。確かに蚕糸に関する膨大な資料等は残ってはいても、その技術継承と実践がなければ、その文化は絶える。

日本文化の基礎に古神道と仏教を置くが、それは礼拝・祈りと無償の利他を神髄とし、その実践を通して人間との繋がりを育むことを教える。蚕糸に関わる意義はここにある。

二十年程前、絹を通して人間とは何かを知る思いから、天蚕の会に入会した。種々の技術の適用と新しい絹素材を開発しながら、この蚕糸状況に対応してきた。

しかし、十年程前、創始者の柳沼泰衛氏がなくなった。一大事であった。この状況を関係各位の努力と精進により克服し、新たな路を拓いて今日に至った。ただ、小生も体調不良に陥り、既に会の事業には参加できなくなった。しかし、会員としてこの創設二十年の感慨は深い。

会の絹と人間との関わりの中で、絹の魅力再発見へ繋がる更なる発展を心から祈るものである。

思い出 大原 理彩子

令和3年秋、大学3年生の時、母蛾検査で初めて天蚕の会の活動に参加しました。

実は私は元々虫が大の苦手で、その日も見学だけのつもりでしたが「せっかくだから」と体験させて頂くことに。封筒から検査する母蛾を取り出した時に、想像以上の大きさにびっくりしたことを覚えています。

翌年から入会し、山付けや収繭にも参加しました。天蚕のことも養蚕業のことも何も知らない未熟者の私を会員の皆さんは温かく迎え入れてくださり作業の合間に様々なことを教えてくださりました。

会員になってまだ日が浅いですが、一番の思い出は収繭です。葉っぱと同じ緑色で見事に隠れた繭を探すのは宝探しのように、会員の皆さんと競うように探しました。初めこそ苦戦しましたが、次第に目が慣れてきて、ぼんやりと眺めているだけでも繭が目に入ってくるようになり、ここにも、あそこにもと、次々に見つかるようになったのが面白かったです。

(大阪大学)

天蚕の思い出 小野 光代

私は大学の時、岩手大学農学部植物病理学研究室に所属していました。研究室には植物防疫分野として応用昆虫学研究室の鈴木幸一先生が時折訪れ、お茶などをお出しておりました。

鈴木先生の授業では、主に蚕の内分泌系の内容でしたが、緑色に輝く天蚕のおりさこ話も印象に残っており、この霊山にも鈴木先生が天蚕のことで足を運んでいらっしゃった事を知り、とても感慨深く思います。

私は現在、福島の手漉き和紙文化の伝承活動を行っています。手間のかかる伝統手工芸品の継承発展には様々な困難があります。

しかし、その幾多の困難を乗り越え、創設20周年を迎えられた事は、会員の方々の並々ならぬ努力があったからだと思います。今後の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

萌葱色に光る君へ 川辺 洋子

初めて会ったのは20年前、ふしぎな緑色？大きな繭の君は整然と並んで中川集会所に飾ってあった。美しく光って見えた。萌葱色と教えてもらったがその色言葉に納得いかず辞書を開いた。

「葱の萌え出る頃の色」うんぬんいろいろ書いてあつてますますわからなくなった(理屈ではわかるのだが)。君はふしぎな色だ。

学童保育を手伝っていた頃、天蚕の萌葱色の話になった。私には説明出来なかった。ワイワイさわいでいる子供達に出まかせに「イエローグリーン、ホワイトブルーミックス」シーンとなったとたん、「OK!」元気な返事が返ってきた。助かった1年生だった。今時の子は感覚で即わかるらしい。

萌葱色、英名は？天蚕の君、君の英名はどう呼ばれているの？天蚕の会には即答してくれる人達は何人も居るはずだよ、ね？会長！(時には会でもこんなくだらない笑い話の勉強会があつても面白いかもねえ。今度は何作ろうか？製品作りをしながらのおしゃべりでした、ハイ！)

ありがとう「会報」 河田 明芳

私は、縁あって平成二十年に本会会員となった。それ以来、十七年間、天蚕を通じて楽しいお付き合いをしている。振り返って見る時、常に感心するのが「りょうぜん天蚕の会だより」である。

総会開催時に配布されるが、カラー刷りで見易く、会の活動状況を的確に表現しているばかりでなく、天蚕に関する情報収集、トピックス記事として社会情勢に至るまで、多岐にわたって掲載されており、編集者の意図が十分に私に伝わる。

東日本大震災、地球温暖化による猛暑等々の自然災害、新型コロナウイルス感染症の蔓延、世界一部地域での戦争等、現状社会に於いて様々な事象を認知しつつ、天蚕の会活動を維持発展させる努力をする必要がある。

「この年には、こんな事があったね」天蚕の会員皆様の笑顔が満載された「会報(…だより)」が、今後の道標として積み重ねられることを願い、又、楽しみにしている。

天蚕の会活動の課題と成果 菅野 秀一

天蚕の会の活動が20周年を迎え、皆様とともに慶祝するところです。天蚕は萌葱色の繭を結ぶことで神秘的魅力を感じますが、20年という飼育はたやすい事ではなく、野生であるが故に多くの課題がありました。

限られたハウス内では飼育樹の本数、樹高が制限され、また、メッシュネットを張っていてもカメムシ、カエル、クモ、ネズミ、鳥などの天敵被害が多く、殺虫剤、防虫剤の散布は出来ず、又、除草剤等の散布も然り、手作業に依らざるを得ず、土日休日の趣味的作業は不可能であり、当然連日の管理が必須であります。

その他諸々の課題がありましたが、会員皆様の努力によりそれを克服し飼育して参りました。

当会活動方針にある「天蚕の育成と飼育体験交流、繭糸の新たな加工と商品化、地域特産品を創成し活力ある地域づくり、小学校等への天蚕観察繭工芸指導、県内外関係者との交流、展示PR」は、会員の課題克服の努力と並行して正に実践しました。

この20年の大きな成果を会員関係者全員で享受し、更なる進展を計りたいと思います。

故・元会長柳沼泰衛さんの思い出

菅野 正俊

私が伊達市を退職しないで霊山総合支所に居る頃、故・元会長の柳沼泰衛さんがお茶飲みへ足を運んで頂きました。その中で「りょうぜん天蚕の会」の活動状況、天蚕で作ったバッグを皇族への贈り物として購入してもらったことなどを教えてくださいました。

また、地域資源である天蚕をりょうぜん天蚕の会で後世に繋いでいけるよう「商標登録して守って下さい。」と柳沼さんをお願いをしました。

後日、柳沼さんが霊山総合支所を訪れ「会員の方々と相談し商標登録することにした。」と話されました。そして、登録が終了してから商標登録証を持参して見せて頂きました。

そのとき、柳沼さんが「目には見えないが大きな信用、宝物をいただいた。」と喜んでいたことが昨日のように思い出されます。

関係者の方々には、これまで培ってきた天蚕の会の活動、技術を次の世代へ引き継いで行くという大きな目標があると思います。

会員が一致団結して20周年迎えることが出来ました。おめでとうございます。30周年を目指して息の長い活動を頑張ってください。

天蚕の会20周年を迎えて 菅野 保雄

振り返って20年。今は亡き初代会長柳沼泰衛さんに「天蚕の会に入会してくれ」との誘いがあり入会したところです。

天蚕の取り組みは全国的にも極めて少なく、飼育の方法として与える餌の条件、育てる環境の条件など、また、収繭、糸引き、紡ぎ、箆通し(おさとおし)、機織り、織布から個々の完成品を作り出すまで、20年間も続けられたことは誠にご苦労様でした。皆々様のご苦労に対し小生は極めて簡単な作業に当たる傍観者として在籍していたにすぎません。

本年は天蚕の会設立20周年を迎えるに当たり誠にありがとうございます。

天蚕の会創立20周年を祝す 斎藤 慎一

りょうぜん天蚕の会の創設20周年、誠にありがとうございます。これも先輩会員の皆様方の地道な活動の賜だと思います。

私は、霊山石田の出身で、42年間故郷(ふるさと)霊山を離れ、3年前定年退職を機に霊山に戻りました。その時、霊山の有志で日本古来の「天蚕」で町おこしの活動をしていることを知り、故郷霊山に少しでも役に立てればとの思いから会員として入会させていただきました。

新参者ではありますが、天蚕の魅力を後世に伝えるべく精進してまいりたいと思っております。

今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。

蚕との出会い〔蚕が教えてくれたこと〕

島貫 茂

私が天蚕の会に入会させていただいたのが平成22年でした。「萌葱色に光る霊山掛田の夢を織る」と報道されていたことがきっかけです。

早速当地中川の柳沼会長宅にやって来ました。会長様も奥様もおられました。色々お話をしながら1時間ぐらいいましたら「一緒にやってみないか」と勧められました。私は蚕については何もわかりませんし迷いましたが、何でもやってみないとわかりませんので、お願いして会員として一緒に天蚕飼育に参加することにしました。

天蚕飼育は毎日が害虫との戦いです。取っても取っても終わりません。何か良い方法は無いかと考えながら今日まで飼育して来ました。

早いもので天蚕の会が設立して20周年を迎えました。誠にありがとうございます。

これからも会の発展のため頑張ってください。

20周年に寄せて 鈴木 有美子

創設 20 周年、謹んでお祝い申し上げます。
これまで会員皆様のゆるぎない努力とご功績に敬意を表すると共に、今後の更なる会のご発展とご隆盛を祈念いたします。

今春より私は天蚕の会に参加させて頂き、会長の菅野様、工房の八島様をはじめとした会員の皆様に温かく迎えて頂き、色々のご指導賜りましたこと感謝申し上げます。

あの小さな蚕種からふくふくとした成虫にまで育ち、飼育観察させて頂いた時の大きな綺麗さ、又、萌葱色に輝く美しい繭を見た瞬間の感動と自然の素晴らしさが心に強く残っています。

この感動を今後ともまた見続けていけたら幸せだと思います。

皆様と共に一生懸命取り組んで参りますので、引き続きご指導のほど宜しくお願い致します。

天蚕について思うこと 高橋 賢臣

りょうぜん天蚕の会に初めて参加をしてから数年がたちました。大阪からの参加なので全ての行事に参加することが中々出来ませんが、いつも暖かくしてもらい心から感謝しております。

一通りの天蚕を育て収穫していく作業は経験できましたが、まだ天蚕製品の作成には参加できていないのでこれからの目標にしたいです。

私の夢は、天蚕を柱にした蚕糸業を少し大きくすることです。今年は大熊町にも圃場を作れたらと考えています。蚕糸業を少しずつ大きくしていき、誰もが一つだけで良いので天蚕の製品を持っている世の中に成れば良いな、という夢を見ています。

また、それには新しい会員も重要となってくるでしょう。若者の勧誘も引き続き行っていきます。

[大阪大学]

AITTA (アイッタ) 高嶋 マチ子 三浦 健

記念すべき創設20周年を心よりお祝い申し上げます。我々AITTAは、日本の織物を探究し着物地を用いた創作活動に励んでおります。

昨年11月旧堀切邸にて開催された「ふくしま絹の道」にて「銀色に輝く萌葱色の絹」の存在を天蚕糸の話を伺った後、まだ見ぬ宝物への憧れから早速八島様・菅野様をお尋ね致しました。

天蚕の飼育、作業工程や秀逸な製品を拝見させて頂きながら、東北の地に宿る生命の神秘、これまでの多大なる功績等をお聞きし言葉に出来ない感嘆を覚えた事を記憶しております。

服飾の世界は、人々にとって不可欠な分野ではありますが、トレンド等一過性の要素に溢れており研究や学問に根ざす事に関しては進歩が顕著ではないのが現状です。

しかしながら皆様が取り組む姿勢は「ひとつの繊維の可能性」において新たな境地を開かれていくのではないのでしょうか。

このご縁に心より感謝し、皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます。(仙台市)

天蚕の言霊って… 高野 金助

柳沼前会長から「今度野蚕(天蚕)飼育の会を立ち上げるんだよ。手伝ってみなないか。」「何ですか、野蚕って!」「普通の蚕は家蚕で、野蚕は桑を食べない自然の蚕なんだよ。緑色の大きな繭を作るんだ!」情熱あふれる話に感化されてしまい、「いいですよ。出来る事はやらせてもらいます。」

結成から関わらせてもらい、足手まといになりながらも、天蚕に寄せる皆様の熱い思いに支えられて楽しい出逢いを築けた事が財産です。世代を越えて学ぶことがいっぱいあります。

自然の摂理の中で種をつないで次に引き継ぐ営みの神秘に感動しながら日々の自分の暮らしを振り返ったりしながら、柳沼前会長や八島事務局長、皆様方の想いは新鮮な気付きでした。

20年も継続した喜びを共に祝いたいと思います。おめでとうございます。

りょうぜん天蚕の会の思い出 太宰 智美

りょうぜん天蚕の会創設 20 周年、誠におめでとうございます。

私は平成 24 年(2012)に埼玉県から移住し、伊達市の地域おこし支援員として中川地区を訪れたときに、当時の柳沼会長に取材に来るよう声をかけてもらいました。何もわからなかった私に、霊山町の良さや皆さんの暖かいコミニティ、天蚕の不思議さ、美しさを教えていただき、とても感謝しています。BSテレビの取材や、昭和村や機織り機の研修など貴重な体験が出来ました。

長野県の「地域おこし協力隊全国女子会」で出店した時は、天蚕の存在が注目されて、伊達市をアピールすることが出来ました。

今では、小学 2 年と 4 年の娘と一緒に天蚕を観察に行ったり、勤めている子育て支援センターの講座で天蚕ちゃんに触れてもらい、感動してもらえることが嬉しいです。

これからも益々のご発展をお祈り致します。

天蚕、翡翠の色、魅せる色、

日本の自然にとけこむ色 東崎 昭弘

私が天蚕に出会ったのは信州大学大室農場でのこと。もう 50 年以上前になります。

縁あって信州大学で数学・物理を教える職を得、懇意になった蚕糸の先生たち。さまざまな繭の最後に見たのがひととき大きな天蚕繭に驚きました。桑の葉をうけつけないこと、染めがきかないこと、何よりも翡翠のような色に魅せられました。

あれから半世紀、福島悲劇。飯舘村の施設「きこり」の光に吸い寄せられた天蚕蛾。放射能汚染の影響はないのだろうか、気がかりでした。

飯舘村の「アグリ」主人の市沢秀耕氏から「りょうぜん天蚕の会」の菅野会長さんを紹介頂きました。平成 31 年 9 月のことです。これからも長いおつきあいとなります。20 年のふしめ、おめでとうございます。

〔大阪大学核物理研究センター・信州大学名誉教授〕

国重要有形文化財に指定 丹治 純子

私は15年間伊達地方に残る蚕業に係わる用具整理に当たってきました。そこで知ったことについて少し述べていきたいと思います。

市で收藏している蚕具は江戸末期からつい最近まで使われていた約 5,000 点、そのうち 1,344 点は 2019 年に国重要有形文化財に指定されています。これらの蚕具はすべて養蚕農家から寄贈されたものです。

收藏用具の特徴としては蚕業全般(蚕種製造・養蚕・製糸製織・真綿製造・信仰等)に渡っている上に、明治・大正・昭和と変遷していく用具の歴史を見ることが出来ます。

江戸期より使われてきた伊達地域特有の用具が明治後期から徐々に効率性求め移り変わっていく様は日本の近代史をそのまま繁栄しています。また、江戸中期からの繭見本には日本一古いと言われる繭・明治初期輸出されていた繭・品種改良の変遷等その收藏の数々は『蚕種本場』を彷彿とさせます。

日本の近代化を進めた基幹産業の養蚕業の大事な遺産です。大切にしたいと思います。

「天蚕ライングループ」は

いかがでしょうか？ 松浦 妙子

「天蚕の会」設立 20 周年おめでとうございます。原原駅の「天蚕まつり」を知ったのは、伊達広報誌 10 月号でした。

入会します⇒誰かが「会費半額でいいんじゃないか！」と。なんと庶民に優しい会なのでしょう！でも、これっきりだった。前会長がご病気だった頃の混乱かと？ このとき頂いた会報を見て、後日、恭子先生に祖母が残した絹糸の扱いでお世話になっておりましたので、今回私に出来るような事はカメムシ退治かなと思うのです。

今年の作業日は「大谷ライブ」の放送日。欠席したかったのですが、会員達の白い眼が恐ろしくて参加しました。なので、[自分の都合]で中川に行き名前は印字されるので何匹捕ったと数字を[天蚕ライングループ]に報告します。ハウスの様子はわかるし、それを見た別会員が[自分の都合良いとき]にハウスに行きラインに報告。敵の共有化です。仁義無き戦いには退治回数の多さが決め手かも？

登録者だけに、秒で、一斉に情報が届く、この[天蚕ライングループ]はいかがでしょうか？

柳沼前会長と新潟へ 三田村 敏正

平成24年(2012)9月8日、私は柳沼前会長とともに新潟県十日町市へ向かっていました。それは、環境省が企画した「里なび研修会 in 新潟県十日町市」で講演を行うためだったのです。テーマは「天蚕を活用した地域づくりと蛾の種類から見る里山の健康診断」で、天蚕の会として呼ばれたものでした。

ここで、私は「天蚕の生態や飼育について」、柳沼さんは「りょうぜん天蚕の会の取り組みについて」を発表したのです。特に「天蚕の会の活動紹介」では、いつもの柳沼節が炸裂し、会場には笑い声があふれ大きな注目を集めました。

なお、十日町市までは私の車で行きましたが、柳沼さんと二人きりで長時間、どのような話をすれば良いか不安でしたが、こちらも話し好きの柳沼さん、会話が途切れることなく楽しい道中となったのでした。

※インターネットで、「里なび研修会 in 新潟県十日町市」と検索すると、その時の内容を見ることができます。

天蚕の素晴らしさに思う 村川 友彦

福島県内には古くから県北地方に養蚕・生糸そして会津地方には会津木綿、南会津地方には麻織物やかからむし等がみられる。さらに紙布織物も和紙生産が盛んであったころ一部にあったと思われる。

平安時代に税として安達絹(縑(かとり)といわれる目の細かい堅く織った絹布)を納めている。

また、信夫もじずりは絹布に摺り染めの伝説がある。また、福島市茂庭地区にはかつてシナの木を繊維とするシナダ織りがジバタ(地機)により織られ、いわゆる古代織りの伝統が茂庭ダム出来る前まで行われていた。福島県は他に劣らぬ織物文化が古くから発達したことになる。

私が、霊山の天蚕を知ったのは、テレビのニュースで報道されたときで、それ以後是非見学したいと思い、数年前に八島先生にお会いしたことから今日会員としてご指導を賜ることになった次第です。

この素晴らしい天蚕の技が後々に引き継がれることを願うばかりです。 [福島県史学会会長]

緑色の天蚕が魅力

柳沼 信子 柳沼 佐奈枝

「りょうぜん天蚕の会」が創設され、20年も変わらなく活動が続けられた事は本当に素晴らしいことと思っております。

創設時からの会員様も多く、飼育や作品作りなど手間のかかる作業に費やした時間と努力の上に現在の天蚕の会があると思います。

母の代理として途中から参加となった私は、山付けから飼育、そして繭の収穫と糸取り、最後に紡いだ糸で機織りを全て見られる事のありがたさを感じながら活動に参加しております。

自然の賜からの製品作りに関われるのはとても楽しい時間です。家蚕でもその流れは見られるとは思いますが、やはり透き通るような緑色のちょよと気まぐれな天蚕が魅力です。

9年程活動に参加していたのに、卵、繭、蛹は沢山見ましたが、天蚕の幼虫の姿を実際に見ていない事に気づきました。今後は飼育にも携わりたいと思っています。

天蚕は夫婦共通の楽しみ 八島 恭子

月日の流れは早いものです。20年も経ちました。今思い起こせば和紙工芸の仕事で白石市の遠藤唯雄氏の工房を訪ねたとき紙布織を見てその軽さ、吸湿性にすぐれていることに感嘆した。同時に古の人々の手間暇を惜しまぬ手仕事に驚いた。

我が家にある機織り機で是非とも紙布を織りたいと川俣町の山根好子さんに教を乞い、ようやく紙布を織れるようになった。そんな折、夫の飼育する天蚕とやらを知らぬまま入会していきなり天蚕布を織ることになった。はじめは山根氏に経糸をかけてもらっていたが、ふとスマホで経糸のかけ方を見て勉強し自分で整経できるようになった。

私の両親の実家は群馬県赤城山の麓、養蚕の盛んな土地柄でした。二歳から五歳まで祖母宅に疎開、蚕に囲まれて生活した。母は蚕種蛾の鑑別師でしたから蚕糸、織りとかかわりは運命だったかな、と思えてならない。八十路を過ぎ、天蚕という夫婦共通の楽しみを持つというのは感謝です。

会員皆様のご協力で天蚕商品を製作でき、織姫も誕生しており将来に期待できます。

会員皆様が楽しく活動できますことが末永く続会になると思いつつ・・・

天蚕を育てる 八島 利幸

あれから二十三年、前会長去って十年余り…
霊山町体育協会懇親会后『天蚕を育てる』を徹夜
で話したことを鮮明に覚えている。

「遊休桑園に天蚕飼育するのはどうかと県の懸
賞募集に応募したが実態がないと佳作1万円で
終わった」と言ったら、「八島君、俺それやってみ
っから」という。それから二年後「八島君、天蚕の
卵三百できたぞ」とニコニコ顔で訪れた。

「それでは会を結成しましょう。会を作れば助成
金が頂けますよ」と言う、「そんなに簡単に助成
金は出ないよ」という。「いや、地域づくり課に行っ
て助成金をいただく方法を教えてもらうのですよ」
と、担当部局に訪問、丁寧に指導してもらった。元
県庁職員である。

帰路、農林水産課、園芸課、商工課や外郭団
体県農業会議等々を巡り、天蚕飼育を説いて歩
いたが対応は冷ややかだった。二度、三度伺うと
「霊山の二人の変わり者来た」と。あからさまに
「元公務員や教員はおとなしく共済会主催の旅行
でもしていたらいいべし」と言われた。
信子夫人から「うちの人天蚕飼育始めたら生き生
きしているの」と言われた。

(数年前胃潰瘍で除去手術して療養の身であっ
た)彼とお付き合いして頭脳の柔軟性、言動の奔
放さ、天蚕の将来性に話の尽きることはなかった。
彼が去って十年余り、さびしい限りである。

天蚕との出会い 渡辺 美樹子

天蚕との出会い、緑の幼虫がいると聞いた。また、
その幼虫が緑の繭になるという話を聞き、実物をこの
目で見たいと訪れたのが三年前でした。その時期
は、すでに繭収穫後だったので天蚕の幼虫を残念
ながら見る事が出来ませんでした。

そんな状況の中で八島先生がハウスの中からき
れいな緑色に輝く繭を一つ見つけて私の手のひら
にくれました。カイコとは違い、天然の綺麗な緑色の
大きな繭で帰り道は触ったり、耳に近づけて中にい
る蛹の動きを聞いたり、と、初めての天蚕繭に興味
津々でした。

さて、6月中旬にはクヌギの樹にはプックリした沢山
の幼虫がいました。今年もと期待し8月中旬の第二
回繭収穫を楽しみにハウスの扉を開けたら、探して
も探しても繭が見つからず、どこへ行ってしまったの
かと疑問に思っていると、体液を吸われて褐色にミイ
ラ化した幼虫が木にぶら下がっていました。
今年はクチブトカメムシが異常発生し、ハウス全体に
影響し、収穫3回目の私にはとてもショックでした。
来年の対策をこれから会員皆さんで話し合いましょ
う。

短歌 安田 恭子

天蚕の 生糸で織らるる もえぎ色の

ストール纏ふ 記念日の朝

やまゆの 糸に作りし 萌黄色の

コサージュに込める ま幸くあれな

にこやかな 友の来たりて やま繭の

話に花咲く 初秋の午後

嫁ぐ日の あした(朝)の母の おくりもの

萌黄の「ショール」に 生きる力 受く

天蚕のうた

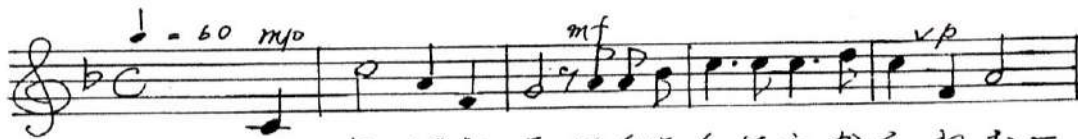
2011 (H23). 1. 26 (水)

作詞 美智子皇后 (1番)

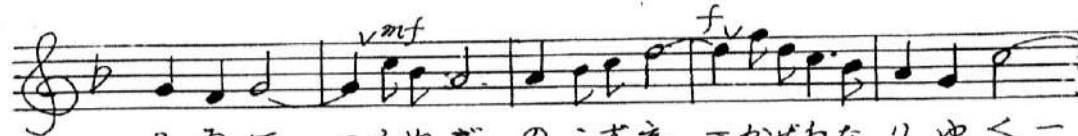
鎌田靖子 (2番)

作曲 木藤俊二

澄みこころで清らかに



1. は か げ な る て ん さ ん は ふ か く ね む ー
2. て ん さ ん に あ い し こ こ ろ の と き ー



り ぬ て ー く ぬ ぎ の こ す え ー か ぜ わ た り ゆ く ー
め き は ー し ん び の せ か い ー お も い め ぐ ら し ー



ー く ぬ ぎ の こ す え ー か ぜ わ た り ゆ く ー
ー し ん び の せ か い ー お も い め ぐ ら し ー

天蚕のうた
平成四年一月十四日
美智子皇后
葉かげなる
天蚕はふかく眠りぬて
標のこすえ
風渡りゆく
鎌田靖子
ニ
天蚕に
逢し心のときめきは
神秘の世界
想いめぐらし
天蚕 ヤマカエのこ
自然の蚕
私や野原の草花をみよ

りょうぜん天蚕音頭

作詞・作曲 欽の公房

1

りょうぜん里山 中川に
世にも美し 緑色
心を和ます その蔭は
皆の気持ちを つないでる

天蚕 天蚕 ヤマカイコ
もえぎ色なる 不思議さよ
どうぞ 世の中明るくと
幸せ 紡いでく

2

りょうぜんふるさと 伊達の里
世にも稀なる その糸は
誰もが見とれる 輝きよ
後光がさしたる ありがたさ

天蚕 天蚕 ヤマカイコ
もえぎ色なる イナバウアー
どうぞ 世の中明るくと
心を つないでく

3

りょうぜん ご当地 暮らすひと
みんなおおらか 元気よく
いつも交わすよ 合い言葉
緑の蔭で 長生きね

天蚕 天蚕 ヤマカイコ
もえぎ色なる 不思議さよ
どうぞ 世の中明るくと
きずなを 強めてく

天蚕 天蚕 ヤマカイコ
もえぎ色なる 楽しさで
どうぞ 世の中明るくと
幸せ 紡いでく



「りょうぜん天蚕の会」

平成17年4月 福島県北農林事務所農業振興部 阿部和弘氏が描いた天蚕のイラスト
平成24年9月 「りょうぜん天蚕の会」の登録商標となる。